

# 喜志南遺跡

— 宅地造成に伴う発掘調査（KSS2014-1） —



2021. 9

富田林市教育委員会

## はじめに

富田林市は、市域の中心を流れる石川によって形成された平野部と、西部の丘陵部、金剛山系に連なる南部の山地部からなる、自然環境に恵まれたまちです。なかでも、平野部や丘陵部には多くの遺跡があり、人びとの古くからの営みを垣間見ることができます。

本書は、2015（平成27）年の宅地造成に先立ち、喜志南遺跡で行った発掘調査の成果をまとめたものです。今回の調査では、二つの重要な発見がありました。喜志地区は、弥生時代に二上山産のサヌカイトを用いた石器製作が行われていたことで有名ですが、それが縄文時代までさかのぼることがわかりました。また、床に埴輪を敷き詰めた特異な石室をもつ古墳がみつかり、それらの埴輪は、世界遺産である大王墓の応神天皇陵古墳と同等のものであることがわかりました。これらの成果は本市にとどまらず、わが国の歴史に新たな知見をもたらすものであると自負しております。本書が有効に活用されることを、望んでやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたって、多大なご協力をいただきました事業者をはじめ、多大なるご指導、ご教示を頂きました関係者のみなさまに、深く感謝の意を申し上げます。

2021（令和3）年9月

富田林市教育委員会  
教育長 山口 道彦

## 例 言

1. 本書は、宅地造成に先立ち実施した喜志南遺跡の発掘調査報告書である。調査地は大阪府富田林市喜志町一丁目に所在し、調査略号は KSS2014-1 である。
2. 調査は、事業者であるシショウ建設株式会社の依頼を受けて、富田林市教育委員会が行った。ご理解、ご協力をいたいたシショウ建設株式会社に、感謝の意を表します。
3. 現地調査は、富田林市教育委員会文化財課職員 角南辰馬を担当として、2015（平成 27）年 3 月 26 日に着手し、同年 5 月 9 日に終了した。調査面積は約 582 m<sup>2</sup> である。現地調査における掘削作業、空中写真測量は株式会社島田組に委託して行った。また、整理作業は角南が担当し、現地調査と並行して開始した。
4. 現地調査にあたっては、同課職員 林 正樹と同課非常勤職員 渡邊晴香が補佐し（ともに 2015 年 4 月より）、調査補助員として、板坂信治、大澤 嶺、土山賀代、土山寧々、山口陽子の諸氏が参加した。整理作業にあたっては、同課非常勤職員 栗田 薫（2019 年 3 月まで）と同課非常勤職員 西村雅美が補佐し（2018 年 7 月より）、宇都宮基よ美、山地美生の諸氏の協力を得た。
5. 本書における執筆と編集は、角南が担当した。遺構および遺物の写真撮影は、角南が行った。
6. 下記の諸機関、研究会、諸氏から有益なご教示、ご助力をいたいた。ご芳名を記して、感謝の意を表します（敬称略・順不同）。

和泉市いずみの国歴史館、大阪府教育庁文化財保護課、大阪府立近つ飛鳥博物館、  
南山大学人文学部人類文化学科、埴輪検討会  
上峯篤史、奥田 尚、小堀明彦、鐘方正樹、河内一浩、木村 理、木村啓章、小浜 成、白石耕治、  
十河良和、千葉 豊、土山健史、西村公助、林 弘幸、原田昌浩、日野 宏、廣瀬時習、森本 徹、  
山田幸弘
7. 作成した実測図、写真、出土遺物については、富田林市教育委員会で保管している。広く活用されることを望むものである。

## 凡 例

1. 本書に掲載した標高は、東京湾標準潮位（T.P.）に基づくものであり、紙面の都合上で数値のみの表記とした。
2. 本書に掲載した座標は、世界測地系に基づくものである。また、平面図の方位は座標北を示している。
3. 土色および遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄 1986『新版標準土色帖』による表記である。
4. 現地調査では、遺構検出と同時に縮尺 1/100 程度の遺構配置略図を作成し、地区や遺構の種類に関係なく通し番号を F 1、F 2、F 3、… と付与していった（F は遺構を意味する feature の頭文字）。本報告書での掲載にあたっては、混乱を防ぐため通し番号はそのまま活かし、一部を除いて F を遺構の種類を表す記号に置き換えた。遺構記号は下記の通りである。

SP : ピット（紙面の都合上、番号のみの場合は SP を指す） SK : 土坑 SD : 溝 SN : 田・畠  
SX : 性格不明遺構
5. 遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗りとし、それ以外は白抜きとした。
6. 参考文献は、巻末に記した。

## 本文目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	1
第2節 現地調査の方法と経過	2
(1) 調査の方法	2
(2) 調査の経過	2
第3節 整理作業の方法と経過	5
(1) はじめに	5
(2) 円筒埴輪	5
(3) 須恵器	6
(4) 繩文土器と石器	6
第2章 調査の成果	
第1節 各調査区の構造の概要	8
(1) はじめに	8
(2) I区	8
(3) II・VI区	8
(4) V区	8
(5) III区	11
(6) IV区	12
第2節 出土遺物	12
(1) はじめに	12
(2) 中世の土器・磁器	12
(3) 古墳時代の土器	12
(4) 弥生・繩文時代の土器	14
(5) 弥生・繩文時代の石器	17
第3章 喜志南1号石室について	
第1節 石室と周辺の状況	19
第2節 床面に敷かれた円筒埴輪	21
第3節 石室以外から出土した埴輪	28
第4節 石室および埴輪に関する諸問題と予察	30
(1) 石室の時期	30
(2) 円筒埴輪の生産地	31
参考文献	
挿図目次	
図1 周辺の遺跡 (左: S=1/10,000) と今回の調査地 (右: S=1/4,000)	1
図2 土層断面柱状図	3
図3 I～III・VI区平面図 (S=1/200)	9

図4	IV・V区平面図 (S=1/200)	10
図5	SK104 および SK102 平面・断面図 (S=1/10)	11
図6	瓦器・磁器・須恵器・土師器実測図 (S=1/4)	13
図7	縄文土器実測図 (S=1/4)	15
図8	縄文土器・土製品・弥生土器実測図 (S=1/4)	16
図9	石器実測図 (S=2/3)	18
図10	II・VI区平面図 (S=1/300) と土層断面図 (S=1/30)	20
図11	喜志南1号石室平面・断面図 (S=1/10)	21
図12	喜志南1号石室の埴輪実測図 (S=1/4) と出土位置図 その1	23
図13	喜志南1号石室の埴輪実測図 (S=1/4) と出土位置図 その2	24
図14	喜志南1号石室の埴輪実測図 (S=1/4) と出土位置図 その3	25
図15	喜志南1号石室の埴輪実測図 (S=1/4) と出土位置図 その4	26
図16	石室以外から出土した埴輪実測図 (S=1/4)	29
図17	喜志東遺跡出土の須恵器実測図 (S=1/4)	31
図18	喜志南1号石室と周辺地形 (S=1/5,000)	32

## 表 目 次

表1	石室内および関連する埴輪の観察表	27
----	------------------	----

## 写 真 目 次

写真1	現地調査とその後	7
-----	----------	---

## 図 版 目 次

図版1	空中写真 (V・VI区)
図版2	各調査区全景・SK104
図版3	喜志南1号石室
図版4	喜志南1号石室
図版5	出土遺物 (須恵器・土師器)
図版6	出土遺物 (縄文土器)
図版7	出土遺物 (縄文土器)
図版8	出土遺物 (石器・板状の石材)
図版9	出土遺物 (埴輪)
図版10	出土遺物 (埴輪)
図版11	出土遺物 (埴輪)

## 第1章 調査の経緯と経過

### 第1節 調査の経緯

喜志南遺跡は、富田林市喜志町一丁目および川面町一丁目に所在し、地形的には石川西岸の低位段丘上に位置する集落跡である（図1）。1997（平成9）年度と2008（平成20）年度に、遺跡範囲内の南側で宅地造成に伴う発掘調査を実施し、縄文時代から中世にかけての遺構、遺物を確認した（富田林市遺跡調査会 1998、富田林市教育委員会 2008）。なかでも、前者の調査でみつかった縄文時代晚期の土坑は重要である。市内における縄文土器の事例としては錦織南遺跡が著名であるが、自然流路内からの出土であり（大阪府教育委員会 1981、錦織南遺跡調査会 1993・1994）、人為的な遺構に伴って出土したことにより大きな意義がある。

遺跡内における本格的な発掘調査としてはこの2例だけであり、大部分は耕作地として開発を受けることなく残されてきた。しかし、これまで調査が手付かずであった北半分で宅地造成の計画が持ち上がり、2015（平成27）年2月12日付で、文化財保護法第93条に基づく発掘届出書が事業者より本市教育委員会に提出された。

開発計画に基づき、同月19日に申請地内の2箇所にトレンチを設定して、事前調査を実施した。1トレンチ（本調査のV区内に相当）では、旧耕作土層の下に遺物を多く含むにぶい黄褐色粘質土層があり、現況面より約60cmの深さで検出した橙色砂礫の地山面には、複数のピットが認められた。2トレンチ（本調査のVI区内に相当）では上記の包含層ではなく、現代耕作土に伴う床土の直下が、明褐色砂礫の地山面となる。現況面からの深さは約20cmと浅く、こちらでも複数のピットが認められた。

このように、申請地一帯に遺構が残存していることが明確になったため、遺跡の取り扱いについて直ちに事業者と協議を行った。新設される道路敷と擁壁部分を、記録保存調査の対象として検討したが、西側の一部はすでに生活通路として利用され、地下埋設物も存在するため、安全面を考慮してそれらは対象から除外することとした。その結果、調査対象となった面積は、約582m<sup>2</sup>である。

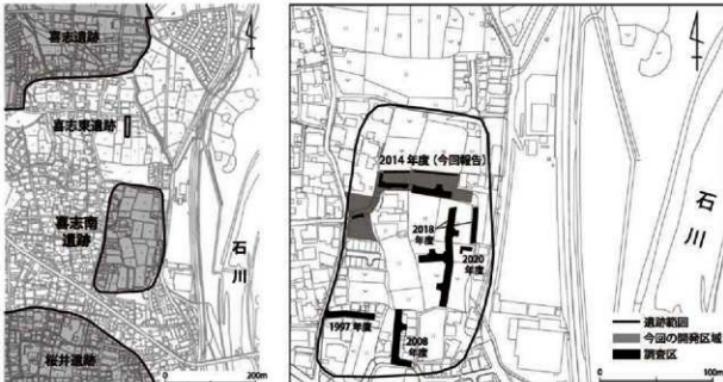


図1 周辺の遺跡（左：S=1/10,000）と今回の調査地（右：S=1/4,000）

## 第2節 現地調査の方法と経過

### (1) 調査の方法

現地調査の日程については、周囲の田に水を引き込む時期までに造成工事を完了させたいという事業者の要望があり、タイトなものとせざるを得なかつた。調査と工事を両立させるため、調査範囲を6つに分け、調査が完了した個所から順に工事に引き渡した。調査区の名称は、機械掘削の開始順にI～VI区（I・II・V・VI区は道路敷、III・IV区は擁壁）とした（図2）。空中写真測量はV・VI区を対象とし、他の調査区については、調査区付近の2箇所に設置した4級基準点および座標グリッド杭を利用して平板測量を行い、現地調査終了後に両者の図面を合成した。そのため、空中写真にV・VI区以外の調査区は写っていない（図版1）。

凡例に記したように、遺構には調査区や遺構の種類に関係なく、通し番号を付与した。ただし、番号がなるべく調査区内でまとまるよう、99まではI～IV区、100～249はV区、250以降はVI区で使用した。また、番号付与後に、遺構の段下げで複数の遺構に分かれることが判明し、個別に番号を振り直したケース（例：V区の100は、101、103、106などの上面に広がっていた落ち込みに該当）や、遺構検出時に複数の遺構が重なったものと捉え、個々に番号を付与したが、段下げによって一體の遺構と判断したケース（例：I区の5～15は、3、16、17、18の耕作遺構の埋土の一部に該当）がある。図3・4の調査区平面図において、遺構番号に欠落があるのはこれらの理由による。なお、上記の理由で遺構記号に置き換えることができなかつたものについては、番号の前にFを付けた当初の表記をそのまま使用し、括弧書きで遺構の位置を補足説明している。

### (2) 調査の経過

現地調査は2015（平成27）年3月26日に着手し、同年5月9日に終了した。実働日数は29日であり、現地調査日誌を記録として次頁より掲げておく。出土遺物等の整理作業は、現地調査と並行して現場事務所で開始し（写真1～6）、現地調査終了後は市立埋蔵文化財センターで引き続き実施した。

日誌にも記しているが、II区で確認した埋没古墳の石室について、当時の状況をここで詳しく触れておきたい。発見の契機は、調査区壁面に石材と埴輪片が露出していたことによる。II区調査最終日の2日前の夕方、石材と円筒埴輪を取り上げるために調査区を拡張したところ、石材が北側に続くことが判明した。さらなる拡張によって小石室であることを特定し、土層観察用の畦畔を残しながら、石室内に堆積した埋土の除去を行った。その結果、壁面に露出していたものに続く形で、床面全体に敷き詰められた円筒埴輪を確認した（写真1-1～3）。

円筒埴輪の径は大型であり、重要な資料であることはすぐに理解できた。石室は調査対象範囲外ではあるものの、工事掘削部分に接しており、現況面から非常に浅い位置にあるため、現地での保存は困難と思われた。翌日のII区調査最終日は、降雨で作業ができないことが確定的であったため、直ちに事業者と協議を行い、翌々日の土曜日に石室の記録保存調査を行うことにご理解をいただいた。

現地調査終了後に出土状況を再現して公開することを念頭に置き、埴輪については、細部の写真を撮りながらブロックごとに取り上げた。石室の石材についても、すべて番号を付与して持ち帰った。このように、壁面での露出に早くから気付きながらも、拡張の判断が遅かつたために、調査日を1日余りしか確保できなかつたが、関係者の尽力によって必要最低限の記録は残すことができた。

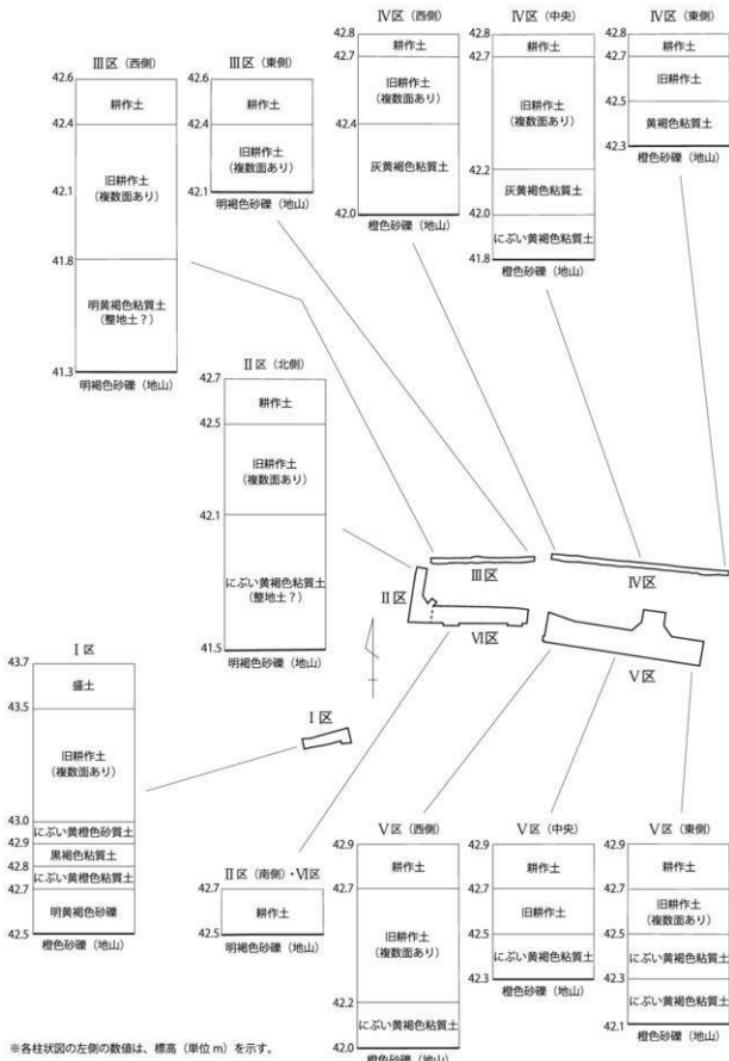


図 2 土層断面柱状図

## 現地調査日誌

### 3月

- 26日（木）晴れ バックホウの搬入。I区の機械掘削と遺構検出。I区の機械掘削終了後、II区に移動して機械掘削を開始し、終了。
- 27日（金）晴れ 引き続き、I区の遺構検出。終了後、調査区全体の平面図と、調査区東壁の断面図を作成し、遺構掘削にも取りかかる。業者による測量杭の設置。II区では遺構検出。
- 30日（月）晴れ I区では、引き続き調査区東壁の断面図の作成と、遺構掘削。II区では、引き続き遺構検出を行い、調査区北端が落ち込むことを確認。III区の機械掘削を開始し、終了。
- 31日（火）晴れ I区では、調査区南壁の断面図の作成と遺構掘削。II区では、調査区壁面の分層。III区では遺構検出。IV区では機械掘削を開始。
- 没古墳の石室であることを認識する。床面の円筒埴輪片の検出作業に追われる。明日は雨の予報のため、養生を入念に行う。
- 10日（金）雨 すべての作業を中止。
- 11日（土）曇り 一昨日の石室確認を受けて、作業を実施。V区では精査が進むが、遺構検出には着手できず。職員および調査補助員は、石室に張り付きで作業を行う。9時～、石室内の土層観察用の畦畔を残した状態で精査。11時～、写真撮影。11時半～、畦畔を取り除き再度精査。13時～、写真撮影。13時半～、石室の平面および立面図、平板による拡張部分の平面図の作成を手分けして行う。16時50分～、床面の埴輪片に番号を付与し、順に取り上げる。すべての埴輪片を取り上げ後、全景を写真撮影。17時半～、石室の石材を番号順に取り上げる。18時20分～、写真撮影。18時40分、II区でのすべての作業を終了。堺市文化財課の土山健史氏が来訪、多大な支援を受ける。

### 4月

- 1日（水）雨 作業中止。土器の洗浄。
- 2日（木）晴れ I区では、引き続き調査区南壁の断面図と、調査区全体の平面図を作成。II区では、落ち込み部分にサブトレレンチを設定して人手掘削し、遺物がほとんど含まれないことを確認したうえで機械掘削。IV区では機械掘削が終了。遺構検出、調査区壁面の分層。
- 3日（金）曇りのち雨 I区では調査区全景を写真撮影。終了後、機械掘削で下層確認を行なうが、遺構なし。断面図に追記してI区の作業はすべて終了、工事に引き渡し。II区では、落ち込み部分の精査。IV区では、遺構検出。降雨のため、外業は14時に終了し、土器の洗浄。
- 6日（月）雨のち曇り II区では、調査区西壁の断面図作成と遺構の半裁。半裁後、断面図作成。III区では、遺構の半裁。
- 7日（火）雨のち曇り I区では機械による埋め戻しを開始し、完了。II区では、調査区西壁および遺構の断面図を作成。III・IV区では遺構の半裁。
- 8日（水）雨のち曇り 悪天候が続く。午前は降雨ため、V区の機械掘削と土器の洗浄に分かれて作業。午後からII区の掃除を行い、調査区全景を写真撮影。III区では、調査区北壁の断面図を作成。
- 9日（木）曇り II区では、平板による調査区全体の平面図作成。III区では、調査区北壁の分層と、断面図作成。V区では、引き続き機械掘削。夕方、II区において調査区壁面に埴輪片と板石が露出している部分を拡張。並んだ石材が現れたため再拡張し、埋
- 13日（月）曇り時々雨 雨の予報のため、作業中止としたが、ほとんど降らず。石室出土の埴輪の洗浄。申請者と今後の調査方法について協議。
- 14日（火）雨 降雨の中、III区にテントを立てて、調査区全体の平面図と北壁の断面図を作成する。午後からは並行して土器の洗浄。
- 15日（水）曇り時々晴れ III区では、遺構の完掘および掃除を行い、全景の写真撮影。IV区では、調査区全体の平面図を作成。V区では、遺構検出。
- 16日（木）晴れのち曇り III区では、平面図の追記。IV区では、引き続き調査区全体の平面図を作成。
- III・IV区は本日すべての作業が終了。V区では遺構検出を行い、並行して遺構配置測定図を作成。
- 17日（金）晴れ II～IV区では、工事作業による機械埋め戻しが始まる。V区では、引き続き遺構配置図を作成するとともに、遺構半裁を開始。土器を埋納した土坑であるF102とF104について、前者では平面および断面図を作成し、写真撮影を行う。藤井寺市文化財保護課の山田幸弘氏が来訪。
- 18日（土）晴れ V区の遺構半裁。夕方から、石室内出土の埴輪を洗浄。
- 20日（月）雨 降雨のため、すべての作業を中止。
- 21日（火）曇り時々晴れ V区の遺構半裁。遺構の有無が不明瞭な箇所を掘り下げ、再度遺構検出。空中写真測量を5月6日（予備日9日）に実施することを決定。
- 22日（水）晴れ V区の遺構半裁。

- 23日（木）晴れ V区の遺構半裁。調査区南壁および遺構の断面図を作成。
- 24日（金）晴れ V区の遺構半裁。調査区南壁および西壁の断面図を作成。VI区の機械掘削を行い、遺構検出と同時に遺構配置略図の作成。
- 25日（土）晴れ VI区の遺構半裁。夕方から、石室出土の埴輪を洗浄。
- 27日（月）晴れ V区では、遺構の断面図を作成。実測を終了したものから、完掘していく。VI区では、遺構の半裁を行い、断面図を作成。調査区北壁の断面図も作成。予定以上に作業が進んでいるため、空中写真測量を前倒しで5月1日に行うことを決定。
- 28日（火）曇り V区の遺構完掘作業が終了。VI区では調査区北壁に加え、南壁の断面図を作成。
- 29日（水・祝）曇り 空中写真測量に向けて、V・VI区の掃除と白線引きを行う。あわせて、新たに検出した遺構の掘削、断面図の作成。
- 30日（木）晴れ V・VI区の掃除、白線の引き直し。撮影用の足場を組み立て、調査区全景を写真撮影。
- 並行して土器類の洗浄。
- 5月
- 1日（金）晴れ 朝から業者とセクションポイントの計測、10時～、ラジコンヘリによる空中写真撮影および測量（11時半に終了）。その後は土器の洗浄。
- 2日（土）～6日（水）ゴールデンウィークのため、すべての作業を中止する。
- 7日（木）曇り 各遺構に残していた土層観察用の畦畔を取り除く。V区では、全体を薄く機械掘削し、検出漏れていた遺構がないかの確認を進める。並行して土器類の洗浄。
- 8日（金）晴れ 引き続き、V区全体の遺構再検出を行うとともに、一部箇所を深掘りして下層に遺構がないことを確認する。
- 9日（土）雨のち曇り V区で新たに確認した遺構の実測。VI区では、F250およびF251の南側を拡張。遺構の続きを検出、掘削、実測、写真撮影を行う。本日をもって、現地調査を終了とする。

### 第3節 整理作業の方法と経過

#### （1）はじめに

今回の調査では、埋没古墳の石室、初期須恵器、複数の型式にわたる縄文土器、縄文時代に石器製作が行われていたことを示す大量のサヌカイト（以下より、単に「石器」と表記するものについて）は、製品だけでなく、石核や剥片、未製品といった石器製作に関わる遺物も含める）など、調査前の予想をはるかに超える重要な成果が一度に得られた。それゆえに整理作業は難航し、多くの時間を要してしまったが、多くの方がたからご指導、ご教示をいただき、今回の報告にこぎ着けることができた。本節で整理作業の方法と過程について記し、本書における遺物の掲載基準や所見の根拠を示しておきたい。

#### （2）円筒埴輪

埋没古墳の石室については、発見の遅れもあり、調査関係者以外の方がたに現地で実見していただく機会を設けることができなかつたため、まず普及啓発事業を優先した。埴輪は散えてすぐには接合せず、注記作業だけを進め、現地調査終了から約2ヵ月経った2015（平成27）年7～8月、市立コミュニティセンターかがりの郷の文化財展示スペースで、「埴輪のジグソーパズル 第1章－喜志南遺跡発掘調査速報展－」と題したスポット展を実施した。展示ケースを石室内に見立て、埴輪の出土状況を再現するというもので、市立明治池中学校の職業体験として同校の生徒とともに展示作業を行った（写真1-7）。

接合作業は、この展示会終了後に開始した。一定の作業が完了した同年10月、大阪府文化財調査事務所で大阪府教育庁文化財保護課の小浜 成氏をはじめとする職員の方がたに実見していただき、ご教示を得た。同月～12月、かがりの郷で「埴輪のジグソーパズル 第2章－一石川西岸の小さなお墓－」と題したスポット展を、続報として開催した。関連イベントとして、「喜志南遺跡の埴輪物語」と題し

た歴史講座も実施し、会場内に石室の石材を再現配置した。会期中には羽曳野市役所の河内一浩氏に来館いただき、ご教示を得た。

2016（平成28）年1～3月には、大阪府立近つ飛鳥博物館の冬季特別展「歴史発掘おおさか2015—大阪府発掘調査最新情報—」に出陳し、より多くの方がたに成果を見ていただいた。それに伴って作成された展示図録（大阪府立近つ飛鳥博物館2016）には、調査成果の概要を掲載していただいた。

2017（平成29）年11月には、市立寺内町センターで埴輪検討会による資料調査を実施した。比較資料として、川西古墳周辺（甲田南遺跡、錦織遺跡）から出土した埴輪もあわせて実見していただき、実見後には討論を行って理解を深めた。同会からは大澤嶺、奥田尚、小栗明彦、鐘方正樹、木村理、林弘幸、原田昌浩の諸氏の参加があった（写真1-8）。

実見いただいた研究者の方々がたから、報告書の早期刊行を目指すようご指導をいただいていたが、なかなか実現に至らなかった。結果的に埴輪研究の進展の妨げとなってしまった感は否めず、あらためてお詫びしたい。

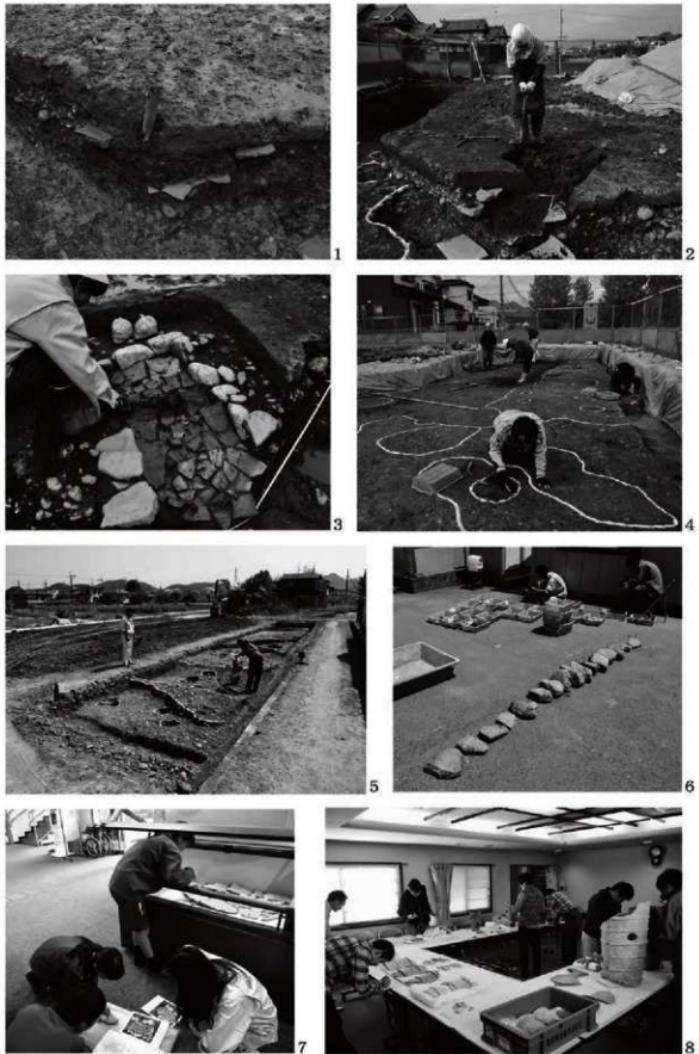
#### （3）須恵器

全体の出土量に対する須恵器の割合は少なく、図化できるものは限られていた。しかし、初期須恵器を含む5世紀代のものが多くを占めており、市内ではほとんど出土することがない重要な資料であるため、可能な限り図化して掲載した。これらのうちの初期須恵器については、2021（令和3）年9月に和泉市いずみの国歴史館の白石耕治氏に実見していただき、ご教示をいただいた。

#### （4）縄文土器と石器

縄文土器については、V区で確認した埋設土器を除くとほぼ小片で占められていたため、口縁部の破片や特徴的な破片を調査担当者が事前にピックアップし、市立埋蔵文化財センターで研究者の方々に実見していただいた。2019（令和元）年12月に大阪府教育庁文化財保護課の木村啓章氏、2020（令和2）年10月に京都大学文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターの千葉豊氏から、土器型式のご教示のみならず、参照すべき文献などについてもご指導をいただいた。

石器については、現地調査時の担当者の「思い込み」が、整理作業に支障をきたした。調査地がサヌカイトの産出地である二上山に近く、弥生時代中期の石器製作地として著名な喜志遺跡のある喜志地区において、石器が多量に出土するのは「普通のこと」であり、気にとめるものもなかった。しかし、整理作業を進めるうちに、縄文土器の出土量が弥生土器に比べて圧倒的に多いこと、すなわちこれらの石器が縄文時代に伴う資料である蓋然性が高いという、重大な事実に気付いた。遅きに失したが、南山大学人文学部人類文化学科の上峯篤史氏に実見していただき、整理方法についてもご指導いただきことになった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期となり、入稿が迫った2021（令和3）年7月の実施となったため、それ以前に調査担当者が抽出したものしか図化できなかつた。上峯氏をはじめ、同大学・学院の学生諸氏からいただいたご教示を本書に十分反映できなかつたことをここでお詫びしたい。この検討会は市立埋蔵文化財センターで実施し、調査担当者が出土した石器を事前にすべて抽出したうえで、縄文土器とあわせて実見していただいた。この際にピックアップしていただいた石器の一部は、写真図版に掲載した（図版8）。



1. 喜志南1号石室 発見前の状況    2. 喜志南1号石室 拡張風景  
 3. 喜志南1号石室 調査風景    4. SK104（手前中央）とSK102（右後方）の調査風景  
 5. IV区 空中写真測量の準備風景    6. 喜志南1号石室 石室石材と埴輪の洗浄風景  
 7. スポット展示での職業体験の実施風景    8. 墳輪検討会による実見風景

写真1 現地調査とその後

## 第2章 調査の成果

### 第1節 各調査区の遺構の概要

#### (1) はじめに

前章で述べたとおり、今回の調査では調査区を6つに分割した。基本層序は、調査区によって異なるため、調査区ごとに土地利用の変遷をみていきたい（図2～4・10、写真1、図版1～4）。

#### (2) I区

ほかの調査区から離れた西側に位置し、調査前はアスファルト敷きの駐車場として利用されていた。旧耕作土直下のにぶい黄褐色粘質土層を除去すると、遺物を多く包含する黒褐色粘質土が現れたため、遺構検出を行った。その結果、畦畔に区切られた水田もしくは畑とみられる耕作遺構であると結論づけた（SN1～4・16～18）。所属時期については、SN18から肥前系磁器の小片が1点出土しているが、上層から混入した可能性を否定できないため、SN4から出土した瓦器を根拠に、中世以降としておく。このほか、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、石器、埴輪、瓦などが出土した。

これらの遺構の調査終了後に機械による掘削を行い、地山までの各面に遺構が存在しないことを確認している。上層から順に、にぶい黄褐色粘質土層で須恵器甕、明黄褐色砂礫層で土師器羽釜が出土しているが、どちらも小片のため所属時期の確定は難しい。

#### (3) II・VI区

II区の北側を除いて、現代耕作土の直下が地山である。北側は地山面が急激に下降しており、それをにぶい黄褐色粘質土で埋めて整地している。その上には複数面の旧耕作土が認められた。周辺の地形の状況から判断して、この地山面の下降は自然地形によるものと考えて間違いないが、調査時に遺構番号を付与したため、そのままSX27と表記した。このSX27からは円筒埴輪の突堤部分が出土しており、古墳時代以降に埋没したことがわかる。また、II区とVI区の境界付近には地山面の傾斜変換点があり、東側の方がやや高くなっている（図10参照）。

遺構検出は、地山面および整地土上面で行った。II区では、すでに触れたように埋没古墳の石室を確認した。石室内の床面に敷き詰められた円筒埴輪は、今後の引用時の便宜を図るために、「喜志南1号石室」と命名した。「喜志南1号墳」としなかったのは、石室に墳丘が伴うかどうか明確でなかったためである。ほかの遺構としては、溝（SD250・251）、ピットがある。溝はどちらも古墳時代のものと考えられるが、土師器、須恵器、埴輪のほか、縄文土器、弥生土器、石器などが多数出土している。ピットからは遺物が全く出土していないが、SD250と重なって位置しているもの（SP261～265・269・270）については、切り合い関係からすべて溝に先行すると考えられる。

#### (4) V区

調査区東側には段丘崖が迫っているが、調査前の現況レベルはII・VI区よりも20cmほど高い。地山面のレベルも一様ではなく、最も標高が高いのは調査区中央で、調査区西端との間は窪んでおり、旧耕作土面が調査区東半分よりも一面分だけ多い。旧耕作土と地山面の間に、厚さ約20cmのにぶい黄褐色

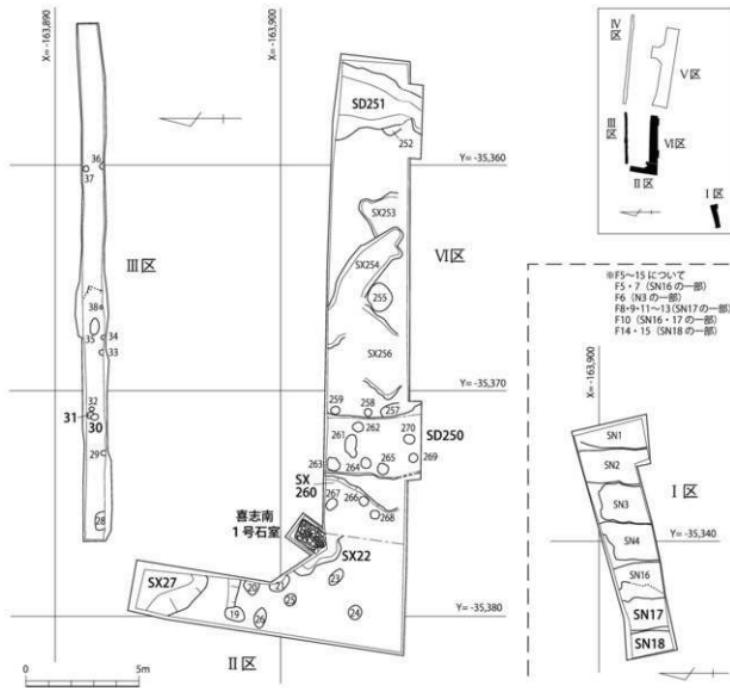


図3 I～III・VI区平面図 (S=1/200)

色粘質土が堆積していた。この土層は、わずかな土色の違いから2つに分層できる。上層には多くの遺物が含まれていたが、下層は遺物を明確に含まない（一見して下層に含まれているように見える遺物は、遺構に属するものと考えている）。調査区壁面の観察では、この下層の上面から遺構が掘り込まれていることを辛うじて確認できたが、面的な識別は困難で、遺構検出は地山面で行わざるを得なかつた。

遺構としては、多数のピットと、土坑、溝、落ち込み、近世以降の井戸を確認した。調査区北東部には黒褐色粘質土が広範囲にわたってみられ、遺構番号をF100として徐々に掘り下げていったが、下層で複数の落ち込み（SX101・103・106・114）などに分かれる結果となった。これらは地山面の縦みに堆積したものであろう。

黒褐色粘質土や落ち込み内からは、多量の遺物が出土した。縄文土器とみられる小片や石器が多くを占めているが、SX101・103には須恵器が含まれており、これらの最終的な埋没時期は古墳時代と考えられる。須恵器と埴輪が出土しているSX205も同様である。



図4 IV・V区平面図 (S=1/200)

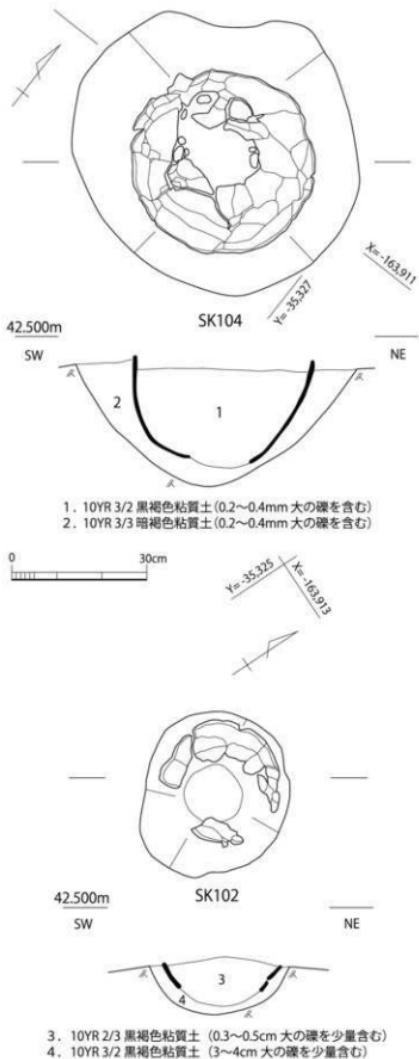


図 5 SK104およびSK102 平面・断面図 (S=1/10)

ピットや土坑について、埋土に瓦器を含むことで中世以降と判断できるもの (SP121・133・161)、須恵器を含むことで古墳時代以降と判断できるもの (SP126・179・190、SK138) を除き、所属時期が分からぬものがほとんどである。遺物のほとんどが縄文土器とみられる小片や石器であり、それらは上記の遺構埋土にも混じっているからである。縄文時代の遺構と特定できたのは、晩期中葉 (篠原期) の土器を埋設した土坑である SK102・104 の 2 基に限られる (図 5)。SK104 は口縁部を上向きに直立状態で据えられていたが、底部は当初から存在しなかったとみられる。口縁部は欠損していたが、内部に小片 1 点が落ち込んでいた。SK102 も直立状態で据えられ、底部は当初から存在しなかったと考えられるが、遺存状態が悪く、胴部の一部のみでかつ全周しなかつた。土器棺としての用途が考えられるが決め手がなく、埋設土器としておく。

### (5) III区

擁壁予定箇所の調査区である。申請区域外に接しているため境界線から控えをとって調査範囲を設定し、狭いトレント状の調査区となった。基本層序は II・VI 区と同様である。地山面もしくは整地土上面で遺構検出を行ったが、10 基ほどのピットの確認にとどまった。地山面のレベルは調査区東端が最も高く、調査区中央に地山面の傾斜変換点があり、それに対応して整地土が西側ほど厚く存在する。

この整地土層内には、瓦器壇と土師器皿が含まれており (図 6-遺物番号 1・3・4)。以下、数字のみは遺物番号を指す)、II 区の整地土層内から出土した円筒埴輪とともに、整地の時期を知る手がかりと

なる。SP36・37 以外の遺構は、その整地土上面から掘り込まれている。遺構埋土からは遺物をあまり確認できなかったが、SP31・32 からは瓦器が出土しており、整地の時期と矛盾しない。

#### (6) IV区

III区と同様、狭いトレンチ状の調査区である。V区の項でも述べたように、遺構面である黄褐色粘質土（もしくはにぶい黄褐色粘質土）の上面では遺構検出が困難なため、地山面で検出を行った。V区に対応するように遺構の数は多いが、埋土からは遺物をあまり確認できず、ほとんど所属時期が分からぬ。調査区ほぼ中央に、地山面に達しない褐灰色粘質土を埋土とする落ち込みがあり（調査区壁面で確認）、円筒埴輪が含まれていた。

### 第2節 出土遺物

#### (1) はじめに

前節では、調査区ごとに遺構の概要を述べた。本節では、調査区にとらわれず、時代別に出土遺物の概要を記す（図6～9、図版5～8）。なお、喜志南1号石室の報告を別章（第3章）として設けたため、変則的になるが、埴輪はここでは触れない。

#### (2) 中世の土器・磁器

検出した遺構のほとんどは所属時期が分からぬことは既に述べたが、瓦器片が出土したI区のSD4、III区のSP30・31、V区のSP121・133・161は、中世以降に属する遺構である。遺物は土器・磁器類や瓦があるが、ほとんどが小片で図化可能なものは少なく、本書に収録した遺物も残存率が低い（図6）。1・3の瓦器塊と、4の土師器皿は、III区の整地土層内から出土したものである。1の瓦器塊は外面調整がナデと指オサエのみで、内面は摩滅しているが、わずかにミガキが認められる。所属時期は13世紀代であろう。2の瓦器塊はIII区の人力掘削中、5の中国製白磁碗はV区の機械掘削中、6の中国製青磁碗はII区の機械掘削中に出土したものである。

#### (3) 古墳時代の土器

須恵器（図6）については、集落跡で普遍的に出土する蓋坏は少なく、図化できたのはここに掲げた3点しかない（7～9）。9は残存率が低く、受部の先端も欠損しているため、復元径について不安が残る。しかし、全体的にかなり厚みがあること、残存部分においては外面に丁寧なナデ調整しか認められないこと（ただし、ヘラケズリをナデ消している可能性あり）など、明らかに通常の坏身とは異なる特徴をもつ。7とともにV区のSX101、8はV区のSX103から出土した。図化できなかった蓋坏の小片はほかに十数点あるが（同一個体の可能性があるものも含む）、時期の判別できるものとしては、SD251から出土した6世紀後半以降の坏身1点が挙げられる程度である。

10は平底の壺であるが、破片が足らず頸部と底部を接合させることができなかつた。外面では、格子状のタタキ痕を軽くナデ消している。百濟系土器を思わせるプロポーションで、SX103から出土した。11・12は甕で、どちらも穿孔部分がわずかに残存している。11はSX103、12はVI区のSD251から出土した。13は体部にカキメを施した壺で、灰かぶりが顕著である。SD251から出土した。14は残存率の高い無蓋高坏で、円形のスカシ孔を3方向に穿つ。V区のSD207から出土した。15は壺で、灰か

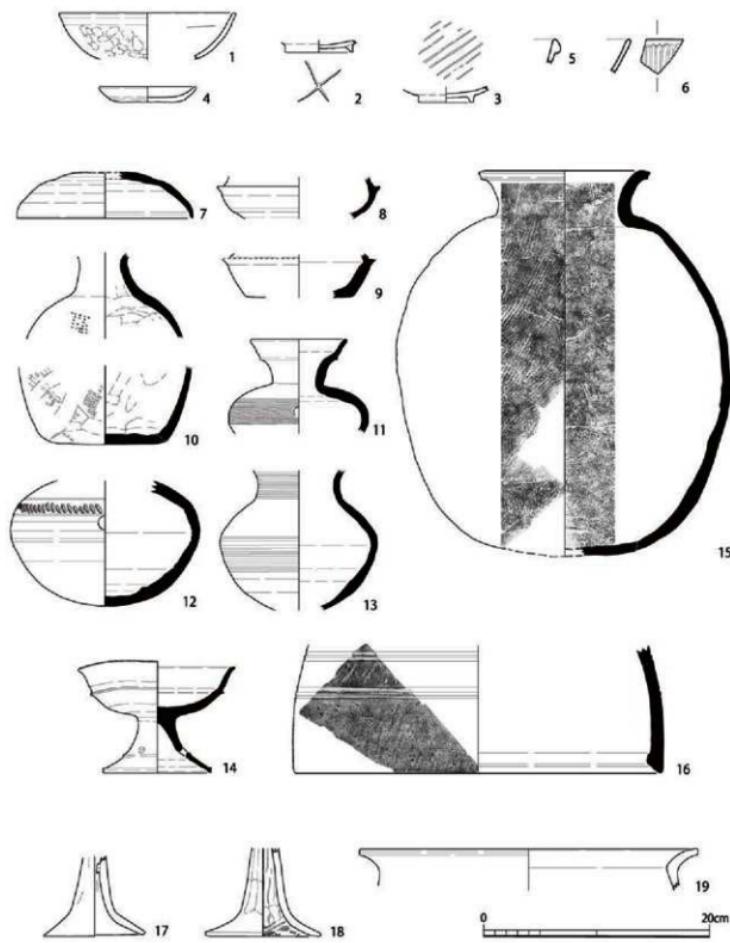


図6 瓦器・磁器・須恵器・土師器実測図 (S=1/4)

ぶりが認められる。通常の壺とは異なり、やや長胴かつ平底のプロポーションで、内面はタタキの当て具痕がナデ消されている。SX103から出土した。16は器台の脚部で、V区の機械掘削時に出土した。

所属時期は、7の坏蓋や16の器台のように6世紀代のものあるが、5世紀代とみられるものが目立つ。特に9の坏身や11の頸、14の高坏は初期須恵器といえるもので、総じて田辺編年のTK73型式に該当すると考えられる。

次に土師器（図6）についてであるが、須恵器に比べると出土量は多い。しかし、ほとんどが小片であり、古墳時代のものか判別できないものも少なくない。図化できたのは3点である。17・18は高坏の脚部で、前者はSX103、後者はVI区のSD250から出土した。後者は内面に布目の圧痕が残る。19は径が大きく、大形の甕もしくは鉢の口縁部であろうか。SD251から出土した。

このように、須恵器の量は少なく、出土した遺構も落ち込みや溝を中心である。また、土師器も全体の形状がわかるものがほとんどない。出土遺物の内容からは、積極的に調査区内に古墳時代の集落が存在したとはいえない状況である。

#### （4）弥生・縄文時代の土器

確実に弥生土器といえるものはほとんどないが、外面にタタキを施した弥生時代後期の土器がI区のSN4、V区のSX205から少量出土している。83～86の4点も弥生土器と判断したもので、すべて底部片である（図8）。83はV区の遺構面精査時、84～86はSX205から出土した。

縄文土器は、後期前半～晩期後半と考えられるものが出土している（図7・8、図版6・7）。市内において、ここまで長期間にわたる型式の土器が一度に出土したのは、今回が初めてである。器種としては浅鉢や深鉢などがあるが、底部片や土坑出土の深鉢を除き、径が不明な小片である。全調査区で出土しているが、土器型式が判別可能な破片のほとんどは、V区のF100内とその下層の落ち込みからである。出土土器すべてを詳細に検討できた訳ではないが、およそその傾向は提示できたと思われる。

縄文時代後期前半 1点のみであるが、20は北白川上層2式と思われるものである。今回の調査では最も古い遺物で、V区のSP115から出土した。

縄文時代後期後半～晩期前半 21～26の6点が宮滝式、27の1点が滋賀里式の古い段階と考えられるが型式が不明なもの、28～37の10点が滋賀里I～II式、38～43の6点が滋賀里II式、44～46が滋賀里IIIa式である。

宮滝式については、すべてV区で確認した。21は機械掘削時、22はSX103、23～25はSX106、26はSP166から出土した。滋賀里式の古い段階と考えられる27は、V区の遺構面精査時に出土した。滋賀里I～II式のものについても、すべてV区からの出土であり、28・29はSX101、30～32はSX106、33はSP113、34はSP123、35はSP131、36・37はSK138から出土した。滋賀里II式については、38がI区の機械掘削時であるが、それ以外はV区からの出土である。39・40はSX101、41・42はSX106、43はSK138から出土した。そのうち、38・39は樋原式と呼ばれる文様が施されている。滋賀里IIIa式については、44はI区のSN17、45はV区のSX103、46はV区のSX106から出土した。

縄文時代晩期中葉 今回の調査で最も多いのが、篠原式のものである。埋設土器であるV区のSK104の60と、V区のSK102の深鉢のほか、破片資料として47～59の14点、当該期と思われる底部片の61がある。

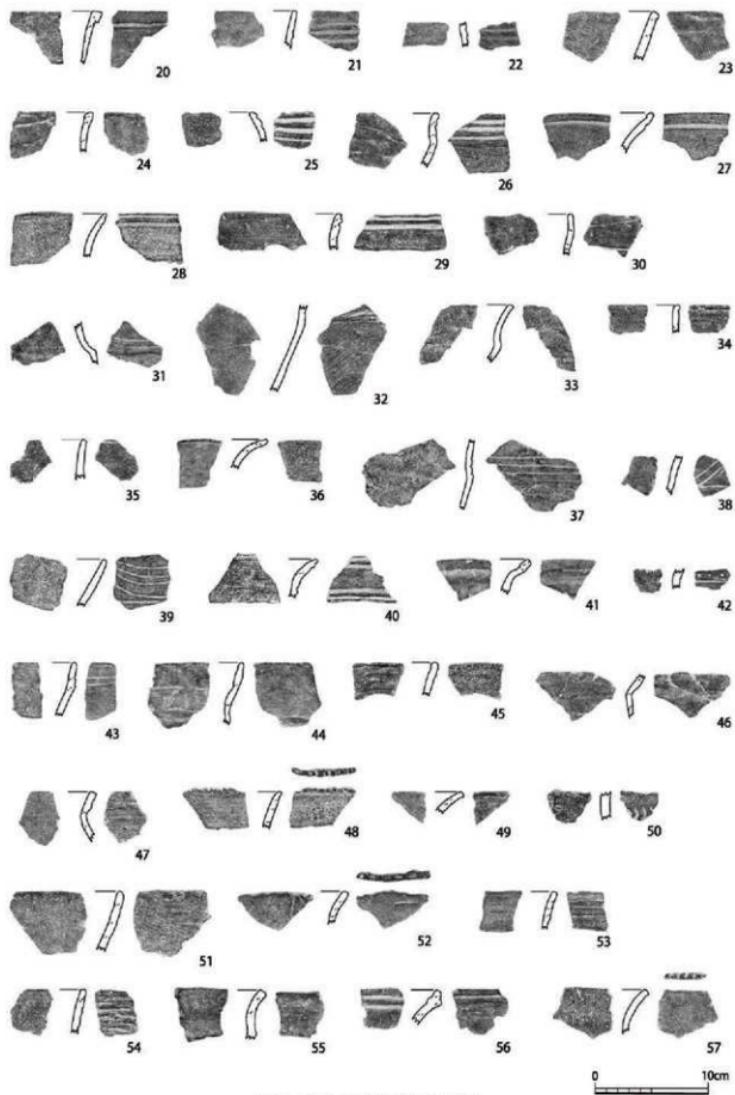


図7 繩文土器実測図 (S=1/4)

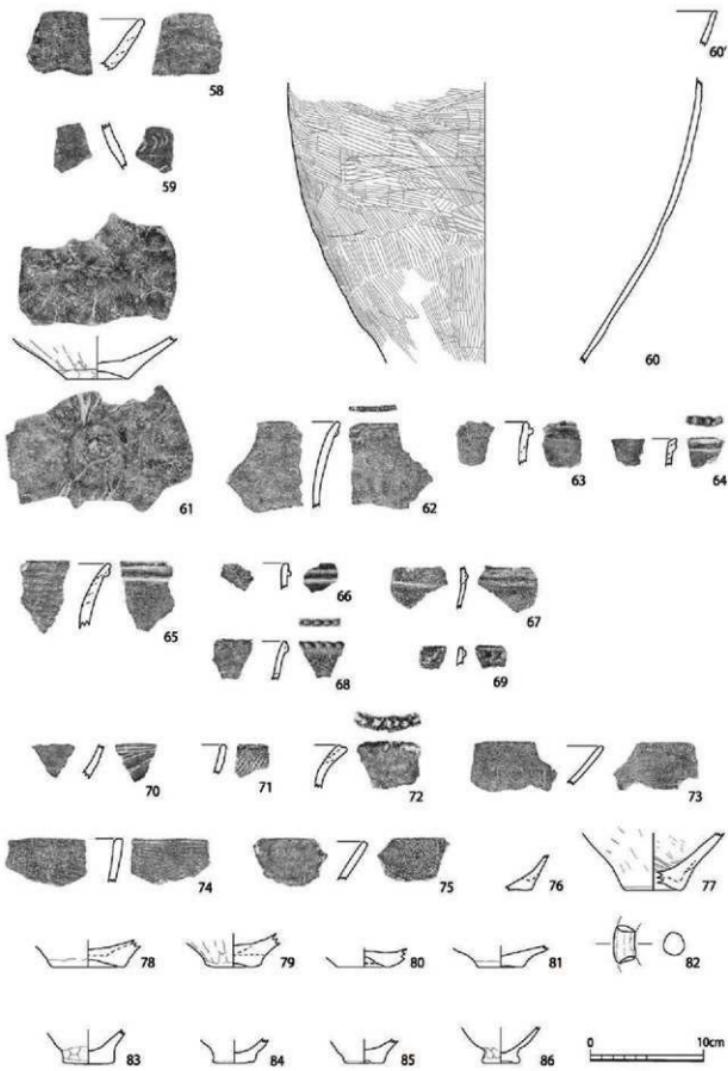


図8 綱文土器・土製品・弥生土器実測図 (S=1/4)

SK104の60は、外面に二枚貝によるものとみられる貝殻条痕が認められる。60'は接合しなかった口縁部の小片で、端部を丸くおさめている。SK102の深鉢は図化できなかつたため写真のみの掲載となつたが（図版7-121）、当該期のものと思われる。50・59は爪形文を頸部に横方向に施したもので、瀬戸内系と考えられる深鉢である。I区出土の47・48を除き、V区での出土である。47はI区の人力掘削時（耕作遺構を検出するまで）、48はF15（SN18）から出土した。49・50はV区の遺構面精査時、51~54・56~58はSX103、55・61はSX106、59はSP135から出土した。

**縄文時代晚期後半** 62~64の3点が滋賀里IV式～口酒井式、65~69の5点が口酒井式である。滋賀里IV式～口酒井式については、62はV区の機械掘削時、63はI区のF10（SN16・17）、64はV区のSX101から出土した。口酒井式については、65はI区のF11（SN17）、66・67はV区のF100内、68はSX101、69はV区のSX103から出土した。

**縄文時代後期～晚期** 土器型式は特定できないが、ここまでみてきた時期幅におさまるものとして70~81の12点と、82の土製品を図化した。70はほかにはみられない色調と精良な胎土の土器で、文様を施している。東北系（大洞式）の可能性がある。80は底部がヘソ状に壅んでおり、製作台の痕跡ではないかと考えられる（阿部1994）。82は縄文時代のものであるとすれば、半輪状土製品の一部である可能性を考えたい。南河内地域における半輪状土製品の出土事例としては、藤井寺市・土師の里遺跡を挙げることができ、所属時期は滋賀里IIIa式～篠原式とされている（大野2013）。

70はI区のF11（SN17）、71はI区の人力掘削時（耕作遺構を検出するまで）、72はI区のF15（SN18）から、73・78・81はV区の機械掘削時、76・79・82はV区の遺構面精査時、74・75はV区のF100内、77はV区のSX101、80はV区のSX114から出土した。

### （5）弥生・縄文時代の石器

V区の落ち込み群を中心に、石核から剥片、未製品、石礫や石錐などの製品まで、整理コンテナ4箱にも及ぶ多量の石器が出土した（図9、図版8）。それらのうち、石礫（87~93）、石錐に比べるとやや大型のため尖頭器としたもの（94）、石錐（95）を図化した。91はI区のSN17から、93はI区の機械掘削時に出土した。そのほかはV区からの出土で、87は遺構面精査時に、88はF182、89はSX205、90はSD207、92はSP195、94・95はSX103から出土した。また、写真のみの掲載した122・123の石錐は、ともにSX101から出土した。以下、上峯氏からいただいた所見を記す（文責は、要約と部分的な補足を行った調査担当者にあることを付記しておく）。

今回出土した石器はすべてサヌカイト製で、原産地は二上山北麓地域と考えられる。弥生時代前期末～中期末の両面加工石器の製作に関わるものと、縄文時代の削器や石錐等の製作に関わるものに分けられる。前者は、調査担当者が現地調査時に想定していた喜志遺跡の資料群との関連が考えられるもので、打製石剣の中央部分の破片などのほか、打製石器の仕上げ加工時に生産される「ポイント・フレイク」が散見される。それらには、SX101出土分のようにまとまりをもつものがある（図版8中央左）。しかし、全体の出土量の割合でいえばわずか5%程度で、ほとんどは後者に該当する。

後者の石材の採集範囲は、二上山北麓地域におけるサヌカイトの給源近くから麓部分、周辺河川までの広域にわたっている。給源近くのものがやや少ないが、偏ることなくほぼ等しく出土している。「いしまくり」と呼ばれる、太子温泉付近の崖錐堆積物から採集できるサヌカイトも、数点含まれている。これらの石器群には、やや大きな剥片を片面へ両面加工して刃部をつけた削器や、石錐が

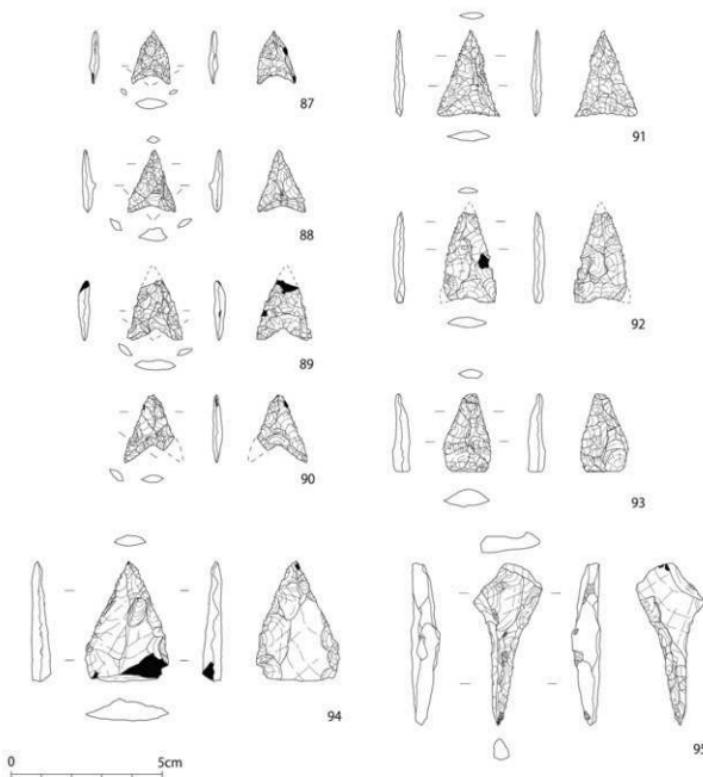


図9 石器実測図 (S=2/3)

みられる。石鏃には「長靴鏃」(上峯2018)がみられるが、角脚鏃はなく、篠原式期の石器群とみなすことができる。なお、95の石錐もこの石器群に属する可能性がある。

また、剥片剥離技術は、上峯氏が論文(上峯2012)で指摘している縄文・弥生時代のその技術に合致する。原石を大きく割り抜き、石核素材を生産する第1工程を窺わせる資料はほぼなく、省略されているとみなせる。第1工程で生産された分割縛や大形剥片から、石器素材剥片を剥離する第2工程に関しては、石核は上峯氏の分類でいう石核I類・石核IV類からなり、剥片もそれと対応する。また、サイクロロ状の原縛を多方面から加撃した石核もみられる。これらの石核や第1工程の省略は、当時の人々との活動域に石材が豊富にあり、形状が一定でない原縛を二上山北麓地域で直接採集しているためと考えられる。縄文時代の喜志南遺跡での石器づくりは自己完結的であり、縄文時代晩期後半のように、複数の遺跡を横断して実施されるようなものではない。

## 第3章 喜志南1号石室について

### 第1節 石室と周辺の状況

今回「喜志南1号石室」と命名した石室は、II区で確認した（図10・11、写真1、図版表紙・3・4）。すでに述べたとおり、調査区が屈曲する部分をはさんで両側の壁面に、板状の石材と円筒埴輪片が露出していたことが発見の契機となった。

石室は、現代耕作土に伴う床土の直下に残存していた。調査時の地表面から検出面までの深さは、わずか20cmほどしかない。構築方法や、それに伴う埴丘の有無については、不明な点が多い。石室の直下を断ち割ることはできなかったが、発見以前に遺構掘削まで完了していたSX22の存在が注目される。石室の下に潜り込むような位置関係にあり、調査区壁面をみると、SX22の肩部とその直上にある褐色粘質土（土色番号3）を埋土とする掘り込みの肩部は、一体的なものとなっている。これは偶然とは思えず、性格は明らかでないものの、石室の構築に伴って掘削された可能性を考えたい。

石室内埋土（土層番号1）と掘方埋土（土層番号2）は、目視では分層できないほど類似していた。また、すでに述べたとおり、II区とVI区の境界付近には地山面の傾斜変換点があるが、その斜面にはSX260の埋土を含む灰褐色粘性砂礫（土色番号5～7）が認められる。類似した土はSX22の北西側にも認められ（土色番号8～9）、これらは石室構築前に整えられた埴丘盛土の可能性がある。

石室の主軸は北東－南西方向であり、残存する内寸は長軸で最大約1.3m、短軸で約0.55mである。短軸にあたる北東辺は、主軸に対してやや斜交しており、東隅が外側に張るような平面形状となっている。石材は鑑定を行っていないため種類や採石地は不明だが、川原石のような石と、板状の石が用いられている。後者は拡張前のII区の壁面に近い南西側に積まれており、前者の1石分の高さに積えるように2、3石が積まれている。残存していた石材の天端から床面までの深さは、最大で約21cmである。これらの石材の平らな面を巧みに利用し、内側に向けることで、凹凸の少ない空間がつくり出されている。

南西辺は、II区の機械掘削時にその存在に気づかず削ってしまったものと考えられ、非常に悔やまれる。しかし、機械掘削中は立ち会っており、床面に敷かれた埴輪の散乱を見逃したとは思えない。よって、調査区断面にかかった埴輪片は、床面の南西端に限りなく近いものであったと考えられる。石室の形態については、南西辺が失われてしまったため、よく分からぬ。調査担当者は堅穴式小石室と考えているが、研究者の方たがに検出状況写真を見ていただいた際には、退化形態の横穴式石室ではないかとの意見もあった。仮に横穴式石室であれば、開口部は南西と考えらえるが、そこに置かれていた閉塞石がほかよりも小さかったために、気づかなかつた可能性も考えられる。

床面には、一面にわたってバラスの替わりに円筒埴輪片が敷かれていた。すべて内面を上に向けており、外側の突堤によって凹凸ができないようにしたものと思われる。石材に接する部分は大きい破片、中央には小さい破片が多く集まっている。円筒埴輪の個体ごとの出土位置は次節で提示するが、隣り合わせで接合するにも関わらず、小さく割れているものがあるのを見ると、遺体の重みによって割れたものがあるのでないだろうか。

石室埋土からは縄文土器とみられる小片1点と、土師質の土器片2点（うち1点は、床面から遊離した埴輪片の可能性もある）が出土したのみで、副葬品は全く認められなかつた。

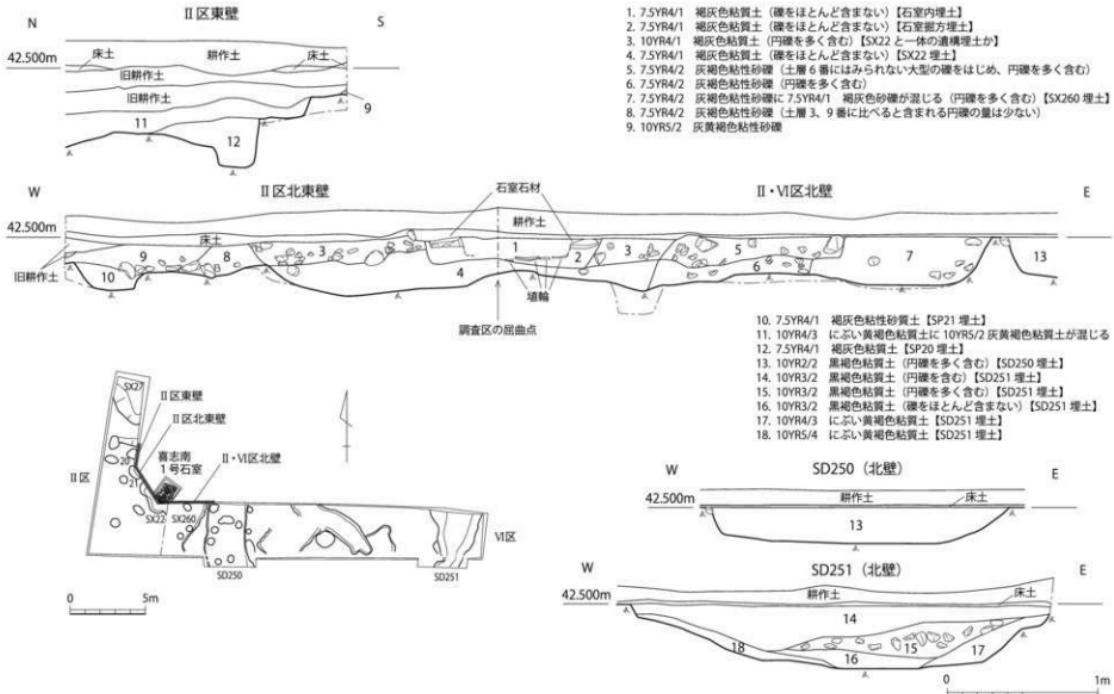


図10 II・VI区平面図 (S=1/300) と土層断面図 (S=1/30)

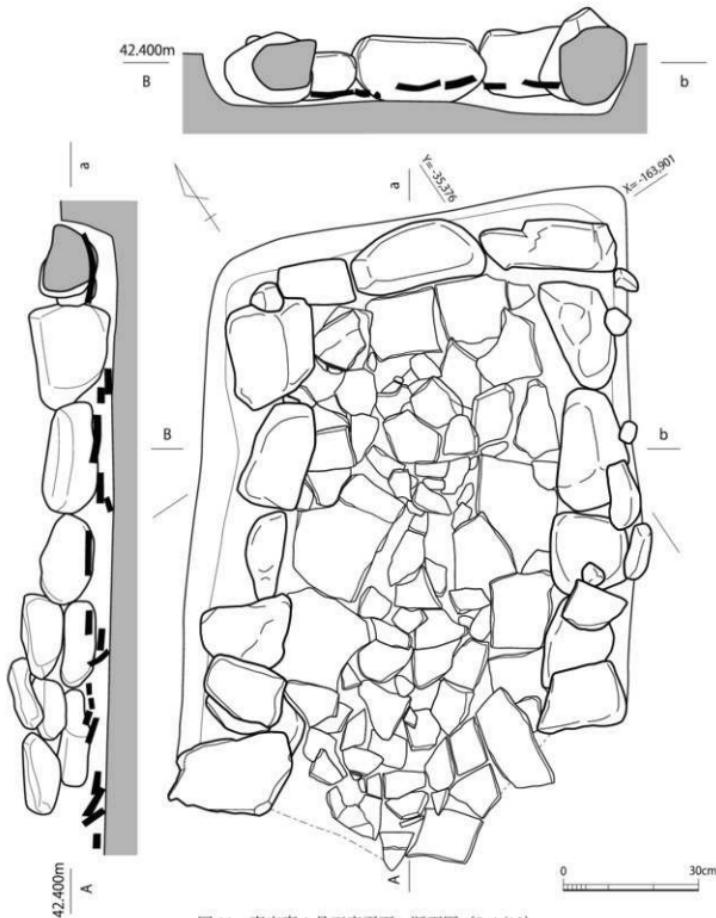


図11 喜志南1号石室平面・断面図 (S=1/10)

## 第2節 床面に敷かれた円筒埴輪

床面に敷かれた埴輪は、すべて円筒埴輪である。後に紹介する石室以外での出土分も含めて、黒斑は認められず、すべて窯窯焼成によるものと考えられる。接合の結果、96~106の11個体分が復元できた(図12~15、図版9~11)。これらのなかに同一個体のものが含まれている可能性は否定できないが、現時点ではすべて別個体と考えている。石室の床面積に対して使われている円筒埴輪の個体数が

多く、いずれも径 40 cm クラスの大型品のため、個々の残存率は高いとはいはず、復元径に不安を残すものが少くない。なお、接合できなかった破片が 3 点残っており（図版 11 中央右）、124 は突帯形状と色調が 100・126 は色調が 105・106 と類似する。

それぞの円筒埴輪の出土位置は、各個体の実測図の横に示したとおりである（黒塗りの部分）。1 箇所にまとめて置かれている個体が多いが（97・99・100・102・104～106）、101 だけは隙間を埋めるために使われたのか、散らばった状態で置かれていた。

観察結果は表 1 にまとめたので、個体ごとに詳細は述べないが、いくつかの項目についての概要と簡単な所見を記しておきたい。

**色調・胎土** 色調については、赤味を帯びたもの（96～101）、黄色味を帯びたもの（102～104）、白味を帯びたもの（105・106）の 3 つに大別することができる。ただし、黄色味を帯びたものは、個体間での差が大きく、とりわけ 102 は胎土が精良で、焼成も良好である。奥田 尚氏のご教示によれば、土師の里周辺で出土する埴輪と比べても、違和感のないものばかりとのことである。

**口縁部** 形状の分かるものとしては 96・97 があり、どちらも外反するタイプである。これらに加え、II 区の機械掘削中、後に石室が発見された付近で採取した口縁部片の 107 がある。採取位置からみて、石室床面から遊離したものである蓋然性が高い。端部を折り曲げるタイプのもので、105・106 と色調や焼成が類似しており、それらの口縁部の形状を示すものであろう。古市古墳群でみられるような、幅の広い突帯状のものを貼り付けたタイプ（貼付口縁）は認められない。

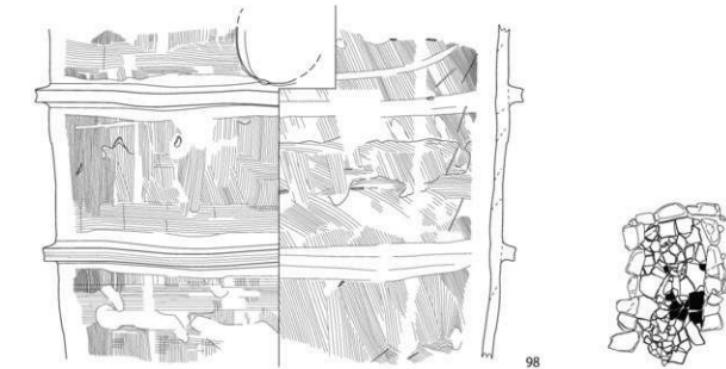
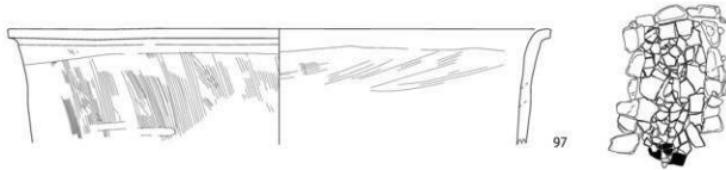
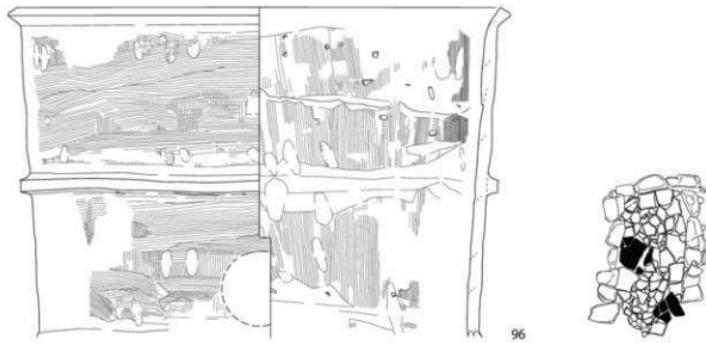
**体部径** 石室内から出土した破片のなかに底部片は 1 点もなく、口縁部が残っているものも上記の 2 点のみであるため、同じ部位で径を比較することができない。あくまで目安となるが、36～48.2 cm の数値が得られている。この規模の埴輪では、口縁部から底部までの径の値が大きく変わることは考えにくく、すべて底部径が 40 cm 前後となる大型品とみてよいであろう。

**突帯とその間隔** 突帯の断面形状と色調に、一定の対応関係が認められる。赤味を帯びた色調のものは、すべて太い M 字形であり、ほかの色調のものは、103 を除いて細い M 字形である。103 は下端がややつぶれたような断面形状を呈する。突帯間隔については、推定を含めて広いものから順に挙げていくと、最も広いものが 99 の 15 cm 台で、96・98 の 14 cm 台、101・103 の 13 cm 台、104・105 の 12 cm 台と続き、最も狭いものが 100 の 11 cm 台である。

**透かし孔** 判明するもののうち、104 を除くとすべて円形である。104 は透かし孔の下端部しか残していないが（写真図版 10 下段右を参照）、後述する所属時期を勘案して方形と判断した。

**外面調整** 2 次調整としては、静止痕の明瞭でない B 種ヨコハケで、かつ 1 次調整のタテハケが広範囲に残るものが目立つ。そのうちの 98・100・101 は、不明瞭ながら静止痕が部分的に認められ、Bb 種ヨコハケに該当すると考えられる。色調はいずれも赤味を帯びている。荒いハケメが多いなかで、102 だけは非常に緻密である。それらに対し、静止痕が比較的明瞭なのが 105・106 で、Bc 種ヨコハケに該当する。色調はどちらも白味を帯びている。なお、96・98・101 のように、内面に製作時の繊ぎ足し痕が明瞭に残っている個体がある（図版 9 の上段右を参照）。2 次調整を終えて一旦休止した後、粘土紐の積み上げを再開し、前回部分に被せる形で外面調整を行ったことで、98 のようにタテハケの下に前回のヨコハケが潜り込んでいるものがある（図版 9 の中段右を参照）。

以上の特徴をみると、埴輪検討会編年図 IV 期に位置づけられる。個体間の比較で見出される差異については、時期差として捉えるほどのものではないと考えられる。Bd 種ヨコハケが確認できないこと、



0 20cm

図 12 喜志南 1 号石室の埴輪実測図 (S=1/4) と出土位置 その 1

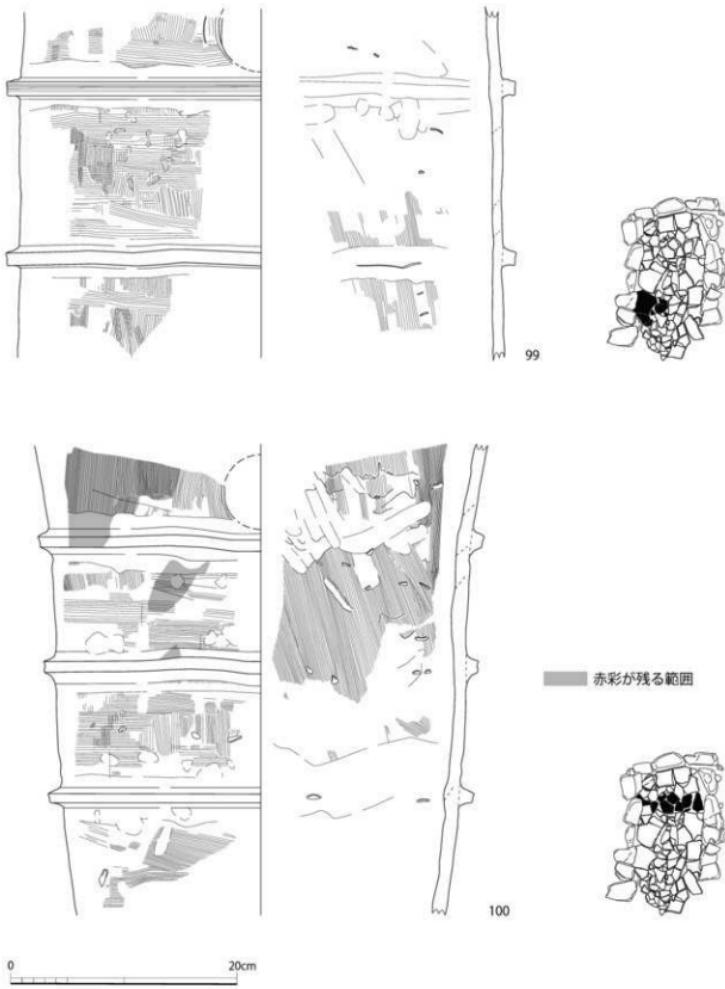


図13 喜志南1号石室の埴輪実測図 (S=1/4) と出土位置 その2

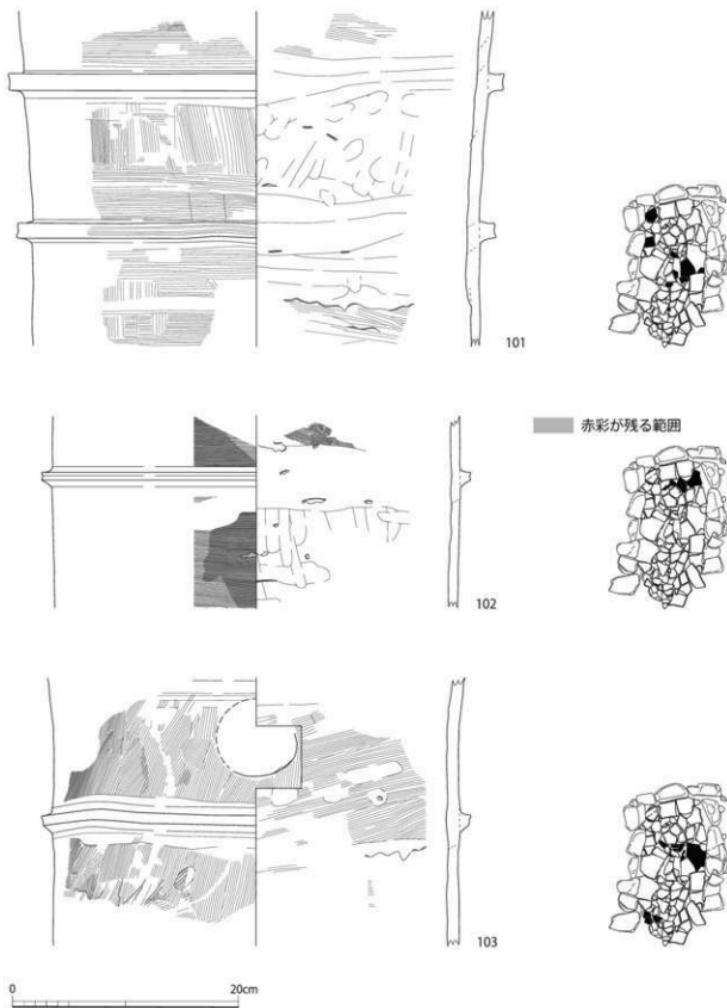


図14 喜志南1号石室の埴輪実測図 ( $S=1/4$ ) と出土位置 その3

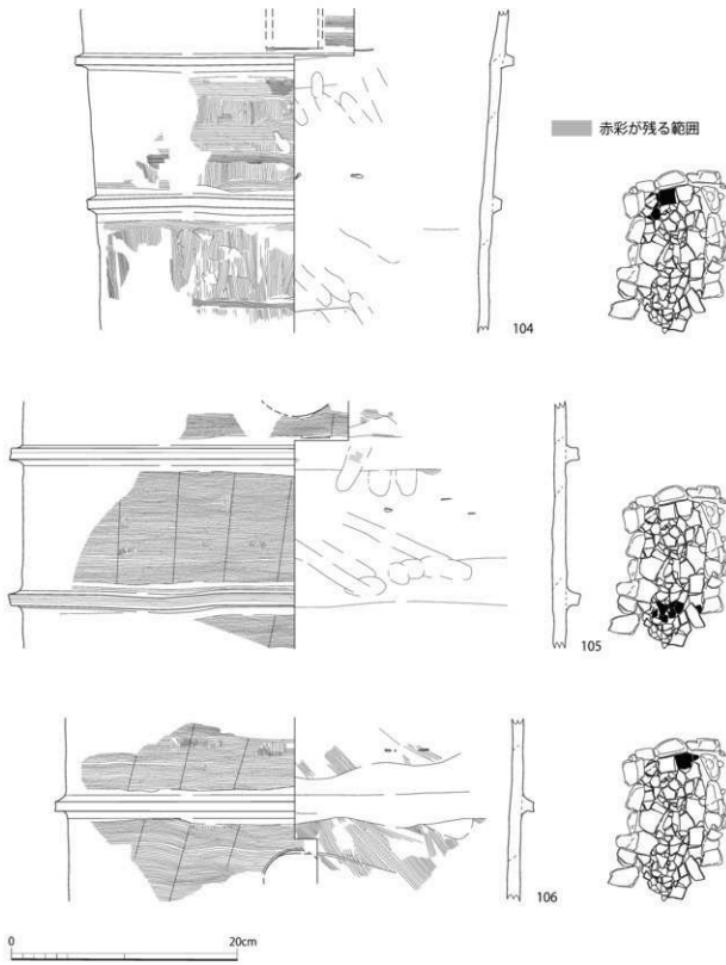


図 15 喜志南 1 号石室の埴輪実測図 (S=1/4) と出土位置 その 4

表1 石室内および関連する埴輪の観察表

遺 物 番 号	出 土 地 點	復 元 寸 法 (cm)	現 存 高 (cm)	現 存 幅 (cm)	現 存 深 (cm)	実際			外表面調査			内面調査	外表面色 (褐色系所 以外)	構成 部	備考
						透 か し 名 称	透 か し 状 態	透 か し 方 法	耐 日 数 (1cm あたり)	耐 水 性 (cm)					
96	1号石室	44.5 (口縁)	29.3	1	14(底面) (口縁高 さ15.3)	円	静止感の明確でない地籠ヨコハ ケ。安帝宮中央にはタテハケが 多く残る。調整後の招手オ サエ底が多く残る	6本	-	タテハケ。安帝宮近は横め方向 のナデです。調整後の招手オ サエ底が多く残る	7.5/8/6 褐色	普通	普通	複数する下端は下段 突起にない。口縁部 より9cm上に残ざま し地が断続的に残る	
97	1号石室	48.2 (口縁)	10.3	-	-	不規	タテハケのみ、一部を横方向 のナデです	6本	-	ナナハケが残るが、下端は ど跡している	8/7/6 褐色	やや 不良	普通		
98	1号石室	40.8 (口縁)	29.6	2	14	円	やや不明瞭な地籠ヨコハ ケ。全体的にタテハケが多く残 る。下段には一筋ナデです	6本	4.5~ 6	中・下段の一面にヨコハ ケ。後側面はヨコハケのナ デです。上・中段に左上より の工具痕があり数本も	8/7/6 褐色	普通	普通	虫みにより復元性 がやや不定定。中段に 横めナデが横に残 る。下段突起にハ ケ目状の基盤あり	
99	1号石室	42.8 (口縁)	30.6	2	15.2	円	静止感の明確でない地籠ヨコハ ケ。安帝宮中央にはタテハケ が多く残る。中段に調整後の 招手オサエ底が多く残る	6本	-	下段突起の両面にタテハケが 残る。大部分は縦・横・斜 め方向のナデです	8/7/6 褐色	やや 不良	普通	口縫に向かってやや 厚めの地が残る。 下段突起にやや 虫み。上段突起にハ ケ目状の基盤あり	
100	1号石室	40.2 (口縁)	41.7	3	11 およそ 11.8	円	やや不明瞭な地籠ヨコハ ケ。全体的にタテハケが多く残 る。上段にはタテハケのみ、 下段突起には工具痕があり 、上段以下には招手オ サエ底が多く残る	9本	-	タテハケ。最上段は横め方向 のナデです。下段突起両面 は横め方向のナデが残り、解 説している部分が多い。	7.5/8/6 浅黄色	やや 不良	普通	最上段全体および 中段の一部の褐色が 残る。最上段・上段 の前面には縦に上げ た柱足に横に残る	
101	1号石室	42 (口縁)	29.8	2	13.2	不規	地籠ヨコハケ。ただし、明確 に地籠ヨコハケの存在の一 部のみで、中段にはタテハ ケが多く残る	5本 (一部は 下段)	3.2	上・下段の一面にヨコハ ケが残る。これは右端は縦・斜 め方向のナデで下す	8/7/6 褐色	やや 不良	普通	下段突起にハメ状 の痕跡がある。下段に 縦足し地が断続的に 残る	
102	1号石室	36 (口縁)	17	1	-	不規	上段にナデナメ、安帝宮両面 は横め方向のナデ。下段は一筋 にタテハケが残るが、縦・横 ・斜め方向のナデで下す	18本	-	2.5/8/4 改良色	良好	良好	全体的に赤い色彩が 残る		
103	1号石室	37 (口縁)	23.7	1	13.5 (推定)	円	一筋にヨコハケがみられる が、人形は左上がりのタテハ ケ	6本	-	右上向きのヨコハケ。下段の ほとんどはナデです	10/8/4 浅黄色	やや 不良	普通	残存する上端は上段 突起に近い。下段に 縦足し地が断続的に 残る	
104	1号石室	37.9 (口縁)	28.7	2	12.6	方	静止感の明確でない地籠ヨコハ ケ。全体的にタテハケが多く 残る	8本 (一部は 下段)	-	斜め方向のナデのみで、ハ ケメなし	7.5/8/3 浅黄色	普通	普通	赤い色彩が部分的に 残る	
105	1号石室	48.2 (口縁)	21.9	2	12.9	円	明確な地籠ヨコハケ。ごく一 面にタテハケが残る	9本	8~ 6	上・中段のごく一部にヨコハ ケが残るが、縦・斜め・横 ・斜め方向のナデです	2.5/8/4 浅黄色	良好	普通	虫みにより復元性 がやや不定定。下段 突起にハメ状の痕跡 があり、安帝宮・上 段の前面に赤い色彩が部分 的に残る	
106	1号石室	40.4 (口縁)	16.2	1	-	円	地籠ヨコハケ。一筋にタテハ ケが残る	9本	8~ 6	ナナハケ。安帝宮両面は横 め方向のナデです	2.5/8/4 浅黄色	普通	普通		
II区機械 施設(1号 石室付近)	-	4.5	-	-	不規	ヨコハケ	9本	-	ヨコハケ	2.5/8/4 浅黄色	普通	普通	色調は105~106に最 も近い		
107	IV区機械 施設	-	3.4	-	-	不規	ヨコハケ	-	-	ヨコハケ	7.5/8/4 浅黄色	良好	普通		
108	IV区機械 施設	-	5.1	-	-	不規	摩滅のため不明	-	-	ヨコハケ	7.5/8/4 浅黄色	やや 不良	普通	色調は104に最も近 い	
109	IV区機械 施設	-	4.1	1	-	不規	摩滅のため不明	-	-	摩滅のため不明	2.5/8/3 浅黄色	やや 不良	普通		
110	III区機械 施設	-	12.3	1	-	不規	静止感の明確でない地籠ヨコハ ケ。安帝宮中央にはタテハケ が多く残る。4本のターフ記号 があり、うち1本は安帝宮に当 たる	8本	-	斜め方向のナデ	8/7/4 に点+褐色	良好	良好	周辺質に近い	
111	S0250	-	9.4	1	-	不規	地籠ヨコハケ。一筋にタテハ ケが残る	8本	4.7	横め方向のナデ	7.5/7/6 褐色	良好	普通	全体的に赤い色彩が 残る。安帝宮にハメ条 の痕跡あり	
112	S0250	-	12.5	1	-	不規	地籠ヨコハケ。一筋にタテハ ケが残る	8本	4.4~ 4.8	下段にヨコハケが残る。縦 足し地の部分は縦・斜め・横 ・斜め方向のナデ	8/6/6 褐色	良好	普通	縦足し地が明瞭に 残る	
113	IV区西端 付近	-	8.7	-	-	不規	地籠ヨコハケ	5本	4.7	ナデ	7.5/7/6 褐色	良好	普通	一筋に赤い色彩が残 る。口と同一個体か	

突帯間隔はバラつきがあるが 10cm 台以下になるものはないこと、1 点だけであるが方形の透かし孔をもつものが含まれることなどから、埴輪検討会編年における IV 期のなかでも前半、さらに踏み込んでいえば IV 期 1 段階にあたると考えたい。実年代でいえば、5 世紀前半ということになろう。

これらの特徴のなかでも、方形透かし孔の存在は注目される。IV 期において方形透かし孔をもつ円筒埴輪は、奈良市・ウワナベ古墳の事例がよく知られており、河内地域においては藤井寺市・狼塚古墳（藤井寺市教育委員会 2007）で 1 点報告されている。現時点で少数事例であることは間違いなく、今後の類例の増加を待ちたい。

市内において当該期の円筒埴輪が出土したのは、今回が初めてである。古墳時代前期においては、南河内最古級の前方後円墳である真名井古墳をはじめ、比較的多くの古墳が造られた地域といえるが、中期は少なく、大王墓を含んで古墳群が形成される百舌鳥・古市地の地とは対照的な状況である。山中田 1 号墳や川西古墳といった、甲冑類を副葬した特筆すべき古墳は存在するものの、今回出土した 5 世紀前半の大型の円筒埴輪を備えるような古墳は、現時点では市内に認められない。喜志南 1 号石室のためだけに、これらの埴輪が用意されたとは到底思えず、供給元を考える必要がある。

### 第 3 節 石室以外から出土した埴輪

すでに触れた 107 の口縁部の破片以外にも、各調査区で円筒埴輪が出土している（図 16、図版 11）。厳密にいえば器種不明の小片もあるが、円筒以外の種類の埴輪は確認できない。

108～114 は石室内の埴輪と同時期と考えられるもので、108～110 は IV 区からの出土であるが、111・112 は小石室に近い VII 区 SD250 から出土している。径は求めることができないが、同じ大型品になると思われる。須恵質のように焼き締った 111・113 や、ヘラ記号のある 113 といった石室内ではみられなかった特徴をもつものが出土している。個々の詳細については、観察表（表 1）に記している。

115～120 は、ここまでみてきた大型品に比べると明らかに径が小さいもので、5 世紀後半以降に属すると考えられる。115～117 は VI 区の SD251 から、118・120 は I 区の人力掘削時（耕作遺構の検出面まで）に、119 は V 区の機械掘削時に出土したものである。115 は口縁部、116～119 は胴部である。116 は突帯の上下、118 は突帯の下、119 は突帯の上に円形の透かし孔がみられる。外面調整が摩滅せずに残っているのは 115・116・118 で、いずれもタテハケ（ナナメハケ）のみである。

120 は今回の調査で出土した唯一の底部片で、摩滅で調整が不明なため時期は分からぬが、推定できる底部径は 20 cm 台であり、出土位置からみても石室内などの大型品と接合するものではない。

さて、図化および図版のみで掲載したものも含めて、調査区ごとの埴輪の出土量を参考データとして示しておきたい。破片の大小に関わらず、埴輪と確認できたものを単純に 1 点（接合したものについてはそのまとまりで 1 点）と数えていくと、最も多く出土しているのは IV 区の 50 点で、次いで V 区の 24 点、VI 区の 19 点、I 区の 4 点、II 区（石室内は含まない）の 3 点、III 区の 1 点である。ほとんどは機械や人力掘削時に出土しているが、遺構別に挙げてみると、IV 区の壁面で確認した落ち込み内が 20 点と最も多く、次いで V 区の SX205 が 14 点、VI 区の SD251 が 13 点、VI 区の SD250 が 6 点、I 区の SN 2 と II 区の SX27 でそれぞれ 1 点である。

また、所属時期の判別できた範囲では、II・III 区は石室内と同じ 5 世紀前半のみ、I 区は 5 世紀後半以降のみ、ほかの調査区はどちらも出土している。V 区の SX205 は両時期が混在しているのに対し、VI 区の SD250 は 5 世紀前半のみ、SD251 は 5 世紀後半以降のみと分かれている。これに関して、現地調

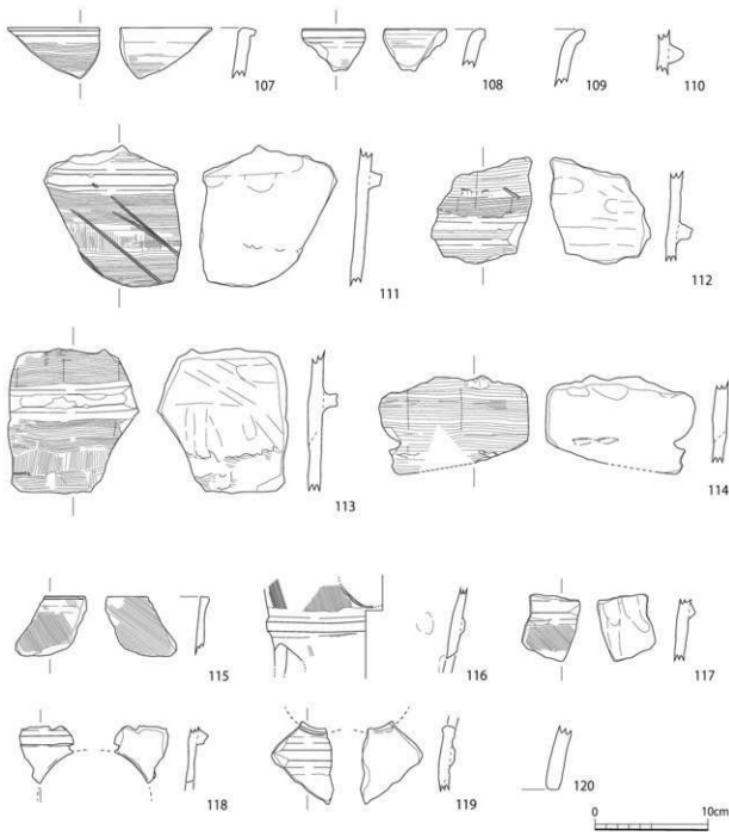


図 16 石室以外から出土した埴輪実測図 (S=1/4)

査が終了して間もないころの検討では、SD250 と SD251 が一体の溝、すなわち古墳の周溝であり、石室の横に別の埋没古墳が存在した可能性を指摘した（大阪府立近つ飛鳥博物館 2016）。しかし、上記のように、埋土に含まれる埴輪の時期が分かれることが、その後の整理作業ではつきりした。現地調査時より気にかかっていた遺構の深さや埋没状況の違いを含めて再考した結果、現在は別の遺構である蓋然性が高いと考えている。SX251 の埋没時期は、須恵器の小片から 6 世紀後半以降と考えられる。

ところで、埴輪ではないが、関連資料として板状の石材にも触れておきたい。V 区の黒褐色粘質土 (F100) 内や SX103 から、石室を構築していたものと似た石材片が出土している（図版 8 下段）。同様の石室がほかにも存在し、後世に破壊されて円筒埴輪とともに散乱した可能性がある。

## 第4節 石室および埴輪に関する諸問題と予察

### (1) 石室の時期

床面に敷かれた円筒埴輪については、5世紀前半という結論を導き出したが、石室の時期はどのように考えればよいだろうか。石室の形態については、すでに触れたように横穴式石室という指摘もあり、大阪府立近つ飛鳥博物館の速報展においては、同館によって6世紀末という時期が示された（大阪府立近つ飛鳥博物館 2016 の 56 頁掲載の年表参照）。調査担当者は6世紀以降という時期を示して円筒埴輪との時期差があることを指摘し、古市古墳群の大王墓に樹立されていたものを再利用したと考えた（大阪府立近つ飛鳥博物館 2016）。具体的な古墳名こそ挙げなかったものの、当該期の大王墓とは、羽曳野市・譽田御廟山古墳にほかならない。

市内における小石室の確認事例は少ない。今回の調査地と近い中野北遺跡では、埋没古墳の小石室がみつかっている。床面からやや浮いた状態で須恵器甕片が出土しており、6世紀以降の構築とみてよいだろう（大阪府教育委員会 2005）。また、錦織遺跡では、埴輪棺の周間に石材を配した特異な小石室がみつかっている。一見して喜志南 1 号石室と似ているが、円筒の形状を棺としているか否かに大きな違いがある。須恵器壺身 1 点が副葬されており、6世紀中頃と考えられる。これらのほか、宮前山古墳群（富田林市史編集委員会 1985）や外子遺跡（大阪府教育委員会 2020）でも小石室が確認されているが、どちらも 7 世紀に下ると考えられる。

円筒埴輪を転用した埴輪棺に比べると、埋葬施設の床面に埴輪片を敷く事例は圧倒的に少ない。管見に触れた限りでは、古市古墳群内でいくつか確認されている。藤井寺市・岡ミサンザイ古墳付近では、墓壇の底に円筒埴輪を敷き詰め、その上に組合せ式木棺を設置し、さらに円筒埴輪で覆うという特異な「埴輪木棺墓」がみつかっている（藤井寺市教育委員会 1988）。土師器壺 1 点が副葬されており、7世紀初頭と考えられる。また、藤井寺市・高塚山古墳周辺では、墓壇に埴輪片を敷いた埋葬施設が複数みつかっている（大阪府立近つ飛鳥博物館 2021）。

このほか、馬見古墳群内にある広陵町・ダダオシ古墳の外堤で確認された箱式石棺内や（奈良県立橿原考古学研究所 2003）、高槻市・塚原 B41 号墳の横穴式石室の玄室内（高槻市史編さん委員会 1973、高槻市立今城廬古代歴史館 2020）にも埴輪片が敷き詰められている。また、奈良市・赤井谷 1 号横穴をはじめとする佐紀古墳群周辺の横穴墓でも、複数確認されているようである（加藤 2012）。

このように、市内の小石室や、埋葬施設に埴輪片を敷く事例をみると、喜志南 1 号石室の築造時期を 5 世紀代にさかのばらせるることは難しいように思われる。しかし、可能性がないわけではない。

ここで注目したいのが、初期須恵器の存在である。今回の調査区においては、古墳時代に集落が存在したとは考えにくいものの、田辺編年の TK73 型式に該当すると考えられる須恵器が、少量ながら出土している。この型式が示す年代は、まさに石室内の円筒埴輪の型式が示す年代と一致する。円筒埴輪の出土だけであれば、転用目的で後に別の場所から持ち込まれたという解釈もできる。しかし、初期須恵器の出土は、埴輪がつくられた 5 世紀前半、喜志の地において人びとが何らかの活動をしていた証拠であろう。石室周辺からも同じ時期の埴輪や、板状の石材が出土していることを合わせて考えると、同様の石室がほかにも存在し、初期須恵器はそれらに伴うものであったと推測することもできる。

なお、現地調査終了後の 2016 年度に、今回の調査地から北へ約 160m 離れた地点で、「喜志東遺跡」が新たにみつかることを付け加えておきたい。設計変更により遺跡保護のうえでの施工となつたため、遺跡の詳細は不明であるが、出土遺物のなかに 1 点だけ時期を判別できる土器が含まれてい

た。それが図 17 に示した須恵器坏身である。小片のため復元径に不安を残すが、高く直立するたちあがりと、凹みのある端部をもち、田辺編年の TK208 型式に該当すると考えられる。5 世紀の動向を知る貴重な資料が、現在の喜志南遺跡の範囲を超えて埋もれている可能性を示唆している。

## (2) 円筒埴輪の生産地

次に、石室床面に敷かれた円筒埴輪がどこから運ばれたのか、再度検討してみたい。すでに触れたように、これらの埴輪を備えるのにふさわしい古墳は市内に存在せず、今後の調査で見つかる蓋然性も低いと思われる。やはり誉田御廟山古墳のために用意されたもので、何らかの理由で石室に再利用されたのみならずのが、最も妥当といえるであろう。

しかし、実際に古墳に樹立していたものを再利用したかどうかは、検討の余地がある。底部の破片が 1 点もなかったことは、地表面に露出していた埴輪を割って持ってきたとする一つの根拠になるであろうが、調査地から誉田御廟山古墳までは直線距離にして約 4.5km ある。石川を利用した水運であれば遠い距離とはいえないかもしれないが、ほかの事例と比較すれば、転用のためだけに運ぶ距離としては離れすぎているようと思われる。

そこで指摘したいのが、近辺に埴輪窯が存在する可能性である。あらためて調査区周辺の地形をみると（図 18）、東は石川に接して低位段丘崖が迫り、北東の通法寺町の集落との間は谷地形となっている。II 区北側と III 区西側では、地表面の急下降を確認しており、現在は中世以降の整地によって目立たなくなっているが、北も段丘内の傾斜変換点に接しているのである。III・IV 区で埴輪の出土量が多いことを考えると、調査区の北に広がる標高 41m 前後の一帯を有力候補地として挙げたい。

誉田御廟山古墳は、国内で 2 番目の埴丘規模を誇る。周堤も含めて配置された円筒埴輪は膨大な数に及び、その生産に多大な人員と労力が必要とされたであろうことは、想像に難くない。生産の本拠地である土師の里以外にも、埴輪の供給地があったと考えることはできないだろうか。

今回出土した円筒埴輪の口縁部形態は、外反もしくは端部を折り曲げるものの、96 のように口縁部高と突堤間隔にあまり差がない。いわゆる普通口縁と呼ばれるもので、誉田御廟山古墳においてほとんどを占めるとされる貼付口縁でないことは、注意が必要である。同古墳の陪塚とされる古墳で出土した大型の円筒埴輪をみると、狼塚古墳で普通口縁と貼付口縁、羽曳野市・栗塚古墳で貼付口縁、藤井寺市・アリ山古墳で口縁部高が突堤間隔の半分以下となる低口縁を確認できる（加藤 2017、木村 2018）。主墳と陪塚で採用された口縁部形態が異なることも考えられるが、現在知られている誉田御廟山古墳の円筒埴輪は、周堤に配置されていたものであり、全体量のごく一部に過ぎない。貼付口縁がほとんどを占めていたことは間違いないと思われるが、普通口縁なども採用されていた可能性はあるだろう。今回 1 個体だけ確認できた方形の透かし孔についても、狼塚古墳にみられるることをふまえて、周堤より先に整備されたとみられる埴丘本体に採用されている可能性を考えたい。

ここまで、喜志南遺跡周辺に未知の埴輪窯があり、誉田御廟山古墳に供給していた可能性を指摘した。これが果たして検討に値するものなのか、調査担当者に判断する力量はない。推測を重ね過ぎた感は否めないが、調査区周辺で増加することが予想される今後の開発に備え、さまざまな想定をしておくことは市の文化財担当者として必要なことと考えている。

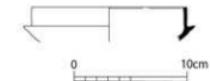


図 17 喜志東遺跡出土の  
須恵器実測図 (S=1/4)

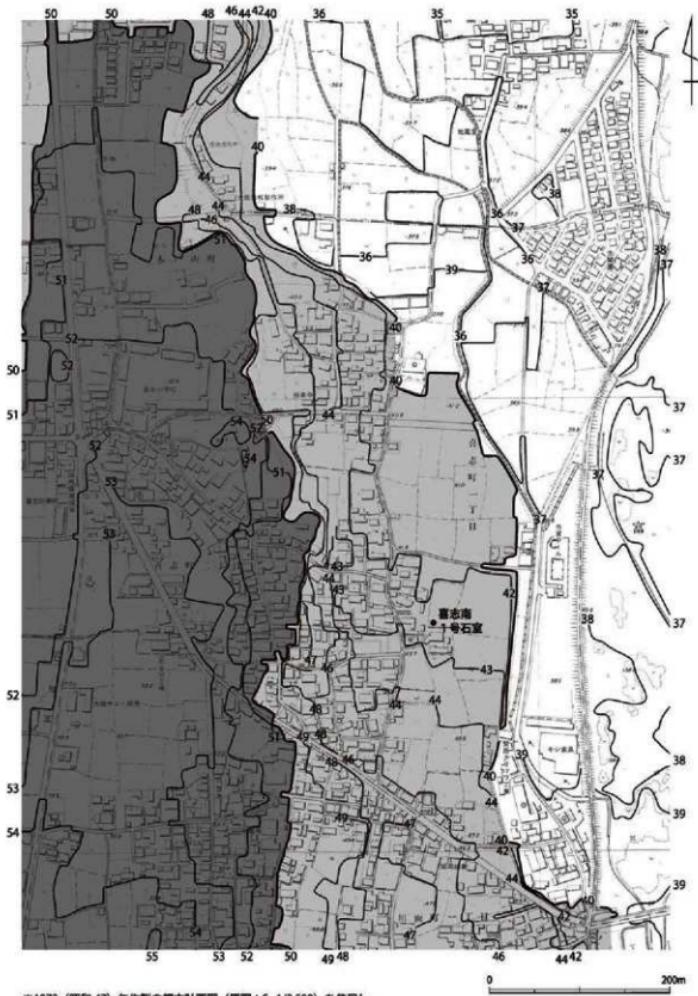


図18 喜志南1号石室と周辺地形 (S=1/5,000)

なお、仮に埴輪窯が近くにあったとすれば、喜志南遺跡を含む周辺一帯にはかなりの量の埴輪片が散布しているはずであり、それを後に転用したと考えることも可能である。石室の築造時期については、円筒埴輪の製作時期と同じ5世紀前半、もしくは5世紀後半以降という二つの案を提示するにとどめ、現時点で結論を出すことは避けておく。今後の資料の蓄積に期待しつつ、今回出土した資料についても引き続き検討を進めていきたい。

## 参考文献

- 阿部芳郎 1994 「後期第IV群土器の製作技術と機能—器体製作における技術的特性とその意義について—」『津島岡大遺跡4—第5次調査—』 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 和泉市いずみの国歴史館 2019『!!!須恵器2!!!—泉北丘陵窯跡群の軌跡—』
- 上峯篤史 2012『縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回』 雄山閣
- 上峯篤史 2011『縄文石器—その視角と方法—』 京都大学学術出版会
- 大阪府教育委員会 1981『錦織南遺跡—縄文時代晚期河道の調査—』
- 大阪府教育委員会 2001『中野北遺跡』
- 大阪府教育委員会 2020『西野古古墳群・外子遺跡』『大阪府教育庁文化財調査事務所年報』24
- 大阪府立近づ飛鳥博物館 2006『年代のものさし—陶邑の須恵器—』
- 大阪府立近づ飛鳥博物館 2016『歴史発掘おおさか2015—大阪府発掘調査最新情報—』
- 大阪府立近づ飛鳥博物館 2021『古墳群に暮らした人たち—集落遺跡からみる古市古墳群—』
- 大野 薫 2013「大阪府土師の里遺跡出土の縄文時代半輪状土製品」『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』17 大阪府教育委員会
- 加藤一郎 2012「赤井谷1号横穴の埴輪とコナベ古墳の埴輪—古墳時代中期開始の画期および共通するハケメをもつ埴輪について—」『埴輪研究会誌』第16号 墓塚研究会
- 加藤一郎 2017「大型古墳とその陪塚の円筒埴輪」『埴輪研究会誌』第21号 墓塚研究会
- 木村 理 2018「古墳時代中期における古市古墳群出土埴輪の系統と生産」『考古学研究』第65卷第1号 考古学研究会
- 京都大学文学部博物館 1991『先史時代の北白川』
- 神戸市教育委員会 2015『縄文時代のこうべー1万年の記憶—』
- 湖西線関係遺跡発掘調査団 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 財団法人 大阪府文化財調査研究センター 2000『向出遺跡—一般国道26号（第2阪和国道）の建設に伴う発掘調査報告書—』
- 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2010『上里遺跡I—縄文時代晚期集落遺跡の調査—』
- 財団法人 八尾市文化財調査研究会 1990『壹振遺跡発掘調査概要報告』
- 第52回埋蔵文化財研究集会実行委員会 2003『埴輪—円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析—』
- 高槻市史編さん委員会 1973『高槻市史』第6巻（考古編）
- 高槻市立今城塚古代歴史館 2020『群集墳と横穴式石室—古墳時代後期の三島—』
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』
- 中世土器研究会 1994『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 富田林市遺跡調査会 1994『喜志南遺跡』
- 富田林市教育委員会 2005『甲田遺跡・喜志南遺跡 発掘調査報告書』
- 中村健二 2008『近畿地方の様相』『古代文化』第60卷第3号（特輯 縄文文化の終焉—関西地方における凸帯文土器の終末—） 財團法人 古代學協會
- 奈良県立橿原考古学研究所 2003『三吉2号墳・ダダオシ古墳 付 三吉3号墳・佐味田狐塚古墳』
- 奈良県立橿原考古学研究所 2011『重要文化財 橿原遺跡出土品の研究』
- 錦織南遺跡調査会 1993『錦織南遺跡』
- 錦織南遺跡調査会 1994『錦織南遺跡II』
- 埴輪検討会 2003『埴輪論叢』第4号・第5号
- 藤井寺市教育委員会 1985『石川流域遺跡群発掘調査報告書』III
- 藤井寺市教育委員会 2007『石川流域遺跡群発掘調査報告書』XXII
- 立命館大学文学部 2016『家根邦多先生著作集』

# 図 版



喜志南1号石室 全景（東から）

図版1 空中写真（V・VI区）



北から



南西から  
(後方中央が二上山)



東から

図版2 各調査区全景・SK104



IV区 全景（東から）



I区 全景（西から）



SK104 埋設土器の状況（南東から）



VII区 全景（東から）



V区 全景（東から）

図版3 喜志南1号石室



全景（南西から）



全景（西から）

図版4 喜志南1号石室



全景（南東から）

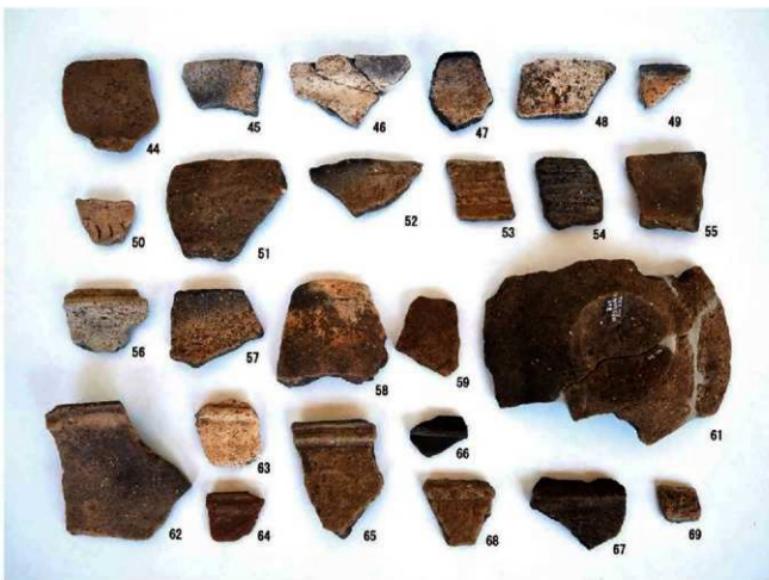
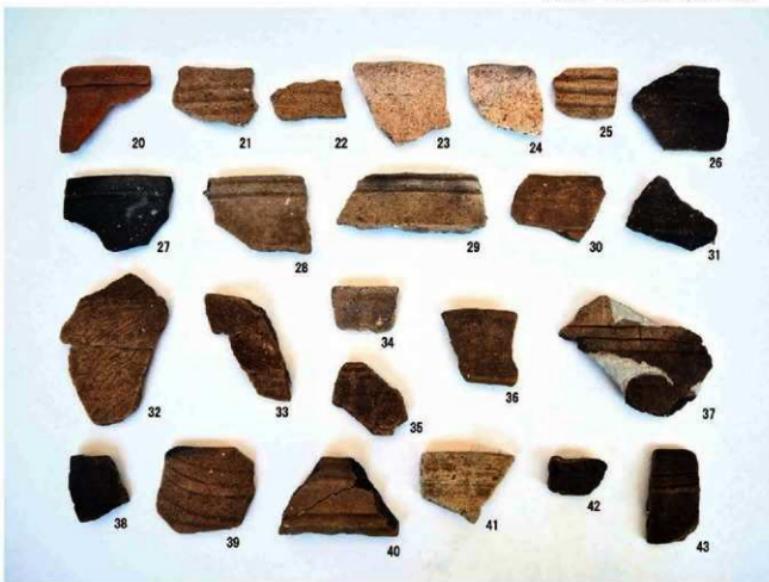


埴輪除去後の全景（南東から）

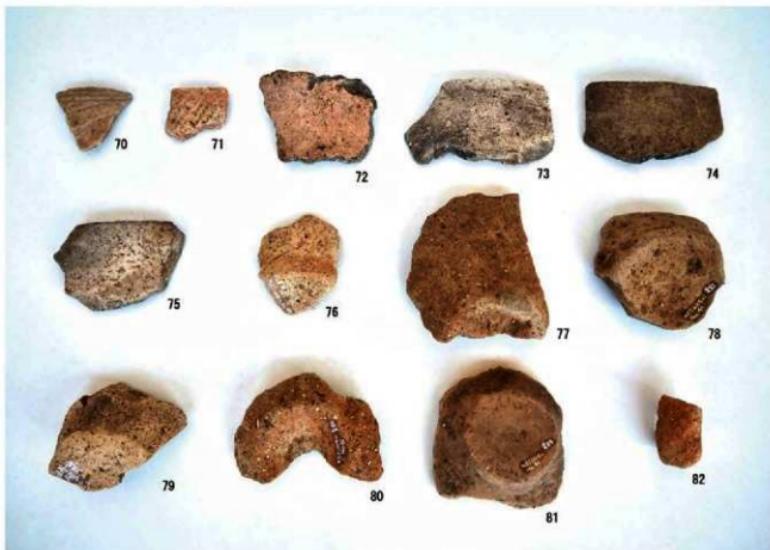
図版5 出土遺物（須恵器・土師器）



図版6 出土遺物（縄文土器）



図版7 出土遺物（縄文土器）



図版8 出土遺物（石器・板状の石材）



弥生時代の石器製作資料（SX101）



縄文時代の石器製作資料（SX101）



板状の石材（左：SX103 右：F100）

図版9 出土遺物（埴輪）



図版 10 出土遺物（埴輪）



99



101



100

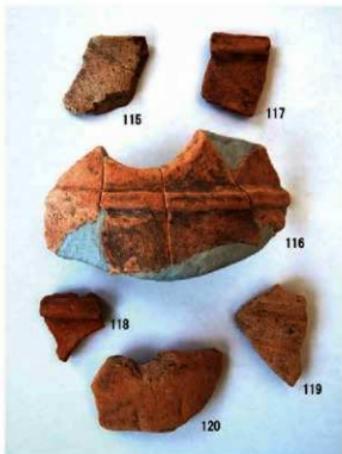
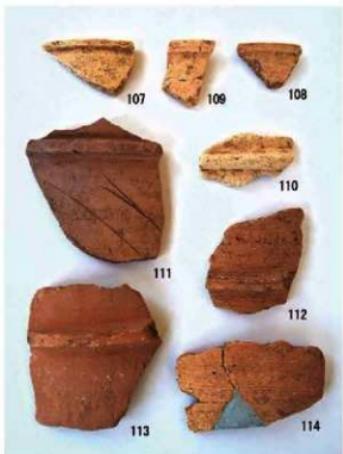


104



104(細部)

図版 11 出土遺物（埴輪）



## 報告書抄録

ふりがな	きしみなみいせき						
書名	喜志南遺跡						
副書名	宅地造成に伴う発掘調査（KSS2014-1）						
シリーズ名	富田林市文化財調査報告						
シリーズ番号	74						
編著者名	角南誠馬						
編集機関	富田林市教育委員会						
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL 0721-25-1000（代）						
発行年月日	2021（令和3）年9月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡 番号	東経	発掘期間	発掘 面積 (m <sup>2</sup> )	発掘原因
きしみなみいせき 喜志南遺跡	とんだばやしきしちょういっちょうめ 富田林市喜志町一丁目	27214	6 31' 19"	34° 31' 19"	135° 36' 53"	20150326 ～ 20150509	582 記録保存調査 (宅地造成)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
喜志南遺跡	集落跡	縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世	ピット、土坑、溝、落ち込み、埋没古墳	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、石器、埴輪			縄文時代では、後期から晩期の複数型式にわたる土器、晩期の埋設土器、石器製作に関するサヌカイト製の石器群を確認した。古墳時代では、初期須恵器、床面に大型の円筒埴輪を敷き詰めた石室を確認した。

## 喜志南遺跡

－ 宅地造成に伴う発掘調査（KSS2014-1）－

発行年月日 2021(令和3)年9月30日

編集・発行 富田林市教育委員会

住 所 富田林市常盤町1番1号

印 刷 明朗社